

日本産蜘蛛類に關する智識の概要を連載せられる事になつて私が筆を執る。今まで種々の雜誌に投書したのや、同好者のあつまりに出て講演した時の筋書などをあつめても可なり分量が得られやう、けれども私は今度は矢張新しく書く決心で居る。拙著小蜘蛛學は稿既に成つて近く印行せられたる筈であつて此書は廣く綱蜘蛛類全般に亘つて居るから動物學をしらべる諸君には多少參考になることもあらうと思つて居る、併し此は其名の通り出来るだけ小く仕上げやうとの考から内容を非常にきりつめたために分類などに關する研究は殆ど全くぬきにしてある、目蜘蛛類の篇では僅かに二章を分類に費して「クモの分類」「日本のクモ」と名付け、前者に分類の群名を掲げ、後者には小學校生徒でも知つて居る様な普通な種類を若干説明して置いたが、之すら餘程強てやつたのであ

つた、それ故も少し精しいものを綴らうと思つて居たところへ主幹秋山蓮三氏の手紙を得たので、喜んで本篇を草する事にした。

私の書いて行く考を述べて置きたい、簡單に言へば日本産蜘蛛類中普通な種、珍奇な種、學術上の智識を大體知り易くするのが目的である。故に研究は本篇全體を讀み終つてから起していたゞきたいので、通讀もせぬ内に彼はと批評されることは甚だ望まぬ、いづれ最末篇には科位までの檢索表を附けて實地の研究に便しよう、屬の詳しい檢索表は私の編輯して居る年報アラクノロギア (Arachnologia) に連載して居るからそれを見られたい。本篇ももとより甚しく詳しいものではないが、新しい研究も出して置くし、他の學者の近頃公にした報告の内引用し得るだけは引用する。

日本産蜘蛛類

岸田久吉



動植物及礦物

次に掲げる科別の表は小蜘蛛學に於て私のはじめて用ゐたるものである、主としてランケスター氏 (Ray Lankester) 及シモン氏 (Eugene Simon) を基礎とする。

蜘蛛目科別表

- リヒスチウス科 Liphistiidae.
- トタテグモ科 Aviculariidae.
- チグモ科 Atypidae.
- カボニア科 Caponiidae.
- ヒボキルス科 Hypochilidae.
- ヒリスタタ科 Frlisatidae.
- エレスス科 Eresidac.
- チリグモ科 Oecubiidae.
- ゾロプシス科 Zoropsidae.
- プセクルス科 Pschridac.
- ウツグモ科 Uloboridac.
- ハグモ科 Dictynidae.
- ヤマシロクモ科 Scytodidae.
- マシラグモ科 Leptonetidae.
- タマゴグモ科 Onopidae.
- ハドロタルスス科 Hadrotaridae.
- キノシシグモ科 Dysderidae.
- イウレイグモ科 Pholeidae.
- コガネグモ科 Argiopidae.
- アルケア科 Archaeidae.

- センセウグモ科 Mimetidae.
 - プロヂドムス科 Prodidomidae.
 - ヘルシリア科 Hersiliidae.
 - ヒラタグモ科 Uroctidae.
 - アムモクセメス科 Ammoxenidae.
 - ワシクモ科 Drassidae.
 - バルビマヌス科 Palpimanidae.
 - ゾダリオン科 Zodaridae.
 - カニグモ科 Thomisidae.
 - ヒトヘグモ科 Platoridae.
 - アシタカグモ科 Heteropodiidae.
 - アハセグモ科 Selenopidae.
 - フクログモ科 Clubionidae.
 - ハタケグモ科 Hahnidae.
 - タナグモ科 Agelenidae.
 - キシダグモ科 Pisauridae.
 - ドクグモ科 Lycosidae.
 - セノクルス科 Senoculidae.
 - ササグモ科 Oxyopidae.
 - ハハトリグモ科 Salticidae.
- 科名に日本名を附したのはすべて日本産の種類であつて、ラテン名に科を附したのは、私の知る範圍に於ては、日本に産しないものである。

リヒスチウス科

之は日本には産しない。學者の認めて居るのは此科では二屬だけである、一つはリヒスチウス (*Liphistius Schiodte*) と言つてビルマ、ビナン、スマトラなどに産する。他の一つはアナチアストテレ (*Anadiastothele E. Simon*) と言つてスマトラの産である。共に面白い點が多し、一二を擧げて見れば腹部には環筋が明かに殘つて居る、一般の蜘蛛では發生中にだけ見る事の出来る環筋がありありと成熟した後にも見られるのである。又普通の蜘蛛には六つしかない蜘蛛 (*Spinigeres*) が八つもある、しかもそれが體の後端でなくて腹部の中央部に位置して居る、此點に注意してランケスター氏は他の蜘蛛全體に對抗する一群と認め、中部に蜘蛛のある類 (*Mesothelae*) と言ふ名の亞目を作つた。

リヒスチウス科以外の蜘蛛は、氏の名によれば後部に蜘蛛のある類 (*Opisthothelae*) と言ふべきである。リヒスチウス科にはまだ一つ奇しい事がある、それは胸板 (*Sternum*) が頗る狭く長いことである、模式屬リヒスチウスでは歩脚の基節の下面から見た廣さと大差がないと言ふ。

トタテグモ科

折々ミガレ科 (*Mygalidae*) として書してある、之は一千八百二年にワルケネール氏 (*Walckenaer*) の作つた屬名ミガレ (*Mygale*) から導いた古い名である、けれども同名は既に一千八百年に名高スキュビエ氏 (*Cuvier*) によつて哺乳類に用ゐられて居るから蜘蛛の方には先取特權が無いに依つて、ラマルク氏 (*Lamarck*) の一千八百十八年に同一屬のために作つた名

日本産蜘蛛類

三〇九

アビクタリア (*Avicularia*) から導いた今の名を用う可である。
特徴 肺が四つあり、氣門も亦四つ。蜘蛛は普通四つし無し、モンメリ氏 (*Montgomery*) は此點を取つてトタテグモ類は、たしかに蜘蛛の一點には大に退化して居るものであるから、リヒノスチウス科に次ぐ位置に排せらるべき程に下等なものではないと論じて居る。觸鬚 (*Palp*) は歩脚と大差がない、唯末端の爪は歩脚と異つて壹個だけである、發生上の確證は無いが他の蜘蛛同様歩脚と見分けのついたのが、再び發達して (土中などにすむため) 斯く成つものかとも思はれる。上顎 (*Chelicerae*) は、大抵甚だ大形で、前方にのみ出て居り、牙 (*Unguis*) を容れるために、體節 (*Patella*) の内下方に二列の齒が並んで居る、牙の前基部には、齒別 (*Resistellus*) と言つて、また小齒が種屬によつて一定の數だけ集つて生じて居る。眼は八個が普通であるが、六個のものもある

所屬

小生の認めて居るものは貳百參拾貳屬であるが、此外に不確なもの尙ほ數多い、之を九つの亞科にまとめ居る。ハラトロピス亞科 (*Paratropidinae*)、アクチノプス亞科 (*Actinopodinae*)、ミガス亞科 (*Migalinae*)、クテニザ亞科 (*Ctenizinae*)、ハリケルス亞科 (*Barycheimae*)、アビクタリア亞科 (*Avicularinae*)、ヂブルラ亞科 (*Diplurinae*)、ブラキボツリウム亞科 (*Brachybothriinae*)、ヘクスミ亞科 (*Hexurinae*)、乃ちそれである。

日本産トタテグモ類

次の七種だけが記載されて居る。

- 一、ツクシトタテグモ (Pachylomerus fragaria W. Doenitz)
 - 二、カミカタトタテグモ (Conothele doentzi K. Kishida)
 - 三、ミヤコジマトタテグモ (Latouchia japonica E. Strand)
 - 四、オキナトタテグモ (I. Swinhoei R. O. Pocock)
 - 五、トタテグモ (Kishinouyeus typicus K. Kishida)
 - 六、タイワントタテグモ (Macrothele holsti R. I. Pocock)
 - 七、和名未定 (Acatyra forezi I. Koch)
- 一は九州の産、二は近畿の産、三及四は琉球の産、五は東京市の産、六は臺灣の産、七は多分本州の産、コッホ氏以來新標品が得られないために困つて居る。分類上は面白いものであつて惜しいことである。一から五まではクテニザ亞科、六はデブルラ亞科、七はブラキボトリウム亞科に屬して居る。此外には採集がさかんになればまだ種が増す見込が充分ある。臺灣在住の博物家などは大に努力すべきであらう、外國人に發表せられてから初めて知ると言ふのでは、誠に憫な物である。學術上にもモンロー主義の物言へば唇寒し、洪嘆々。

トタテグモ

此和名は岸上博士(鎌吉氏)の作られたもの。明治二十二年四月の動物學雜誌第一卷第六號に精しい記載があり、同七月の同誌第一卷第九號に補遺してある。分類上の位置を定めるには私は岸上博士から直接に標品を惠與された、宮古島や沖繩島の種類と甚だ近縁で却々面白いのである。ラテン名は同博士の姓を冒して居る、小生のアラクノロギア第一巻に發表した名である、同博士が日本の蜘蛛類に此種の研究を記念すべく適當の處置と信ずる、如何にや。

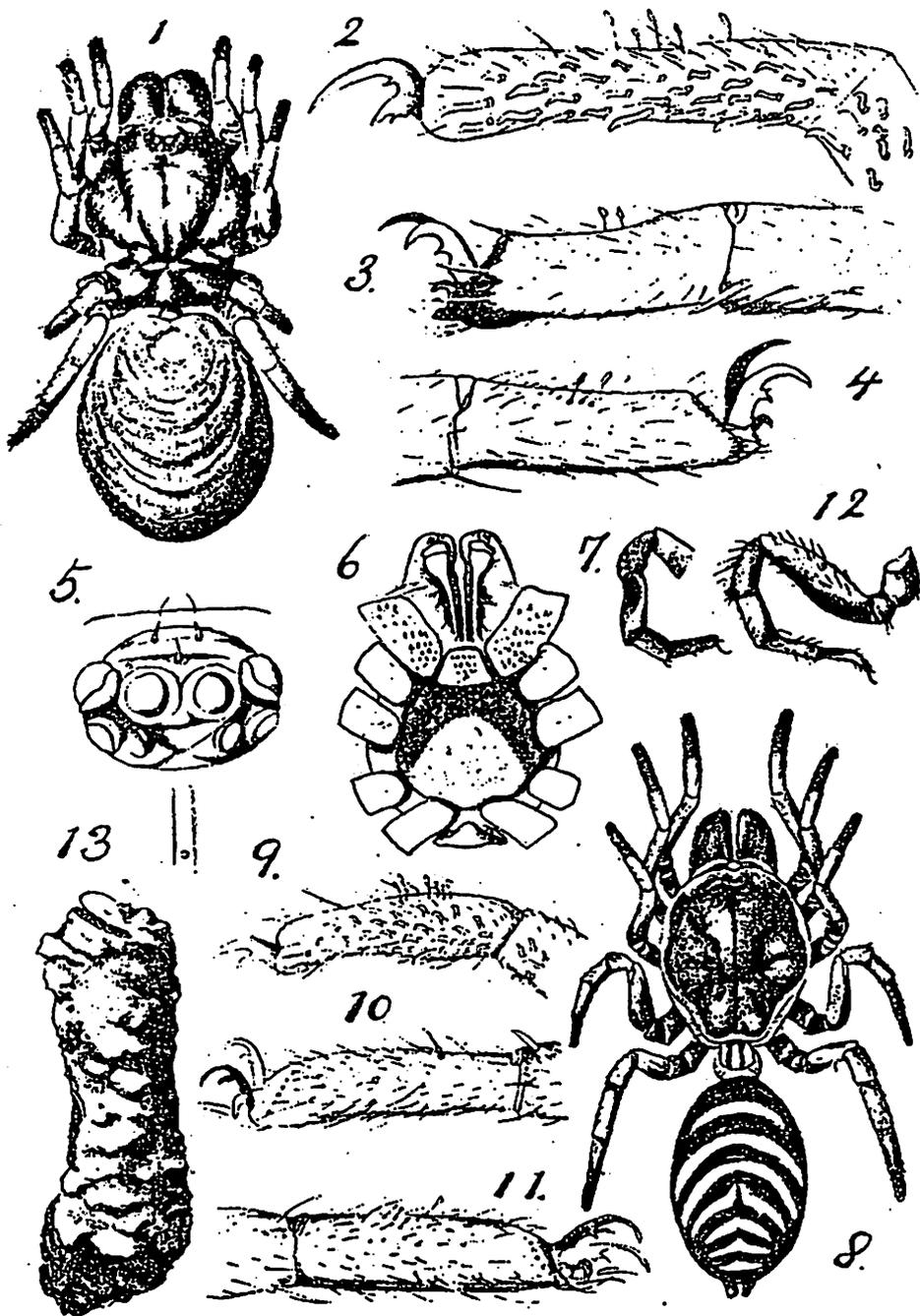
トタテグモの外形は、口繪の圖版によつて大體わかると思

ふ。大さは岸上博士の得られた最大な標品で、十五ミリあつたと書いてあるが、普通標品屋の持つて居るのは、皆十ミリまでの幼い蟲體ばかりである。生時頭胸部の上面即ち背甲は黒色で強い光澤を有つて居る、下面を見ると淡い茶褐色である。歩脚は皆能く發達して居る、最長者は第四對で、最長者は第二對である、遊離端に近い三節は黒色であるが其他の節は茶褐色を呈して居る、觸鬚も歩脚も多くの刺を具へて居る。腹部は上から見ると紫褐色で七本の白條が横走して居るが下から見ると灰茶色である。屬の特徴は宮古島などのトタテグモと似て居るが其族の區別點たる上顎の齒列が九齒でなくして貳列に並べる拾壹齒から出來て居り、下顎の齒が恰も貳拾個を算すると言ふ事は目立つた點である。

既に記した如く本種は東京市の特産であるらしく、私の所へ鑑定を頼んで來るのが、本種は東京産のばかりである。東京では堤の様に傾斜して日當りの宜い所に圖の如き蓋のある管狀の住居を拵へる、深さは九センチメートル位が最大である、蓋を開け様とすると上顎の牙を中心に掛け力を出して閉ぢる。

他のトタテグモ類

ツクシトタテグモとカミカタトタテグモとは樹皮中に住居を作る、居る數は尠くはあるまいが蓋の外面に苔をつけて居るので容易に見付からぬ。タイワントタテグモは恐らくは管狀の住居を作らぬものであらう。讀者諸君中よりトタテグモ類を得られる機會があつたならば御割愛を望む、次はデグモ科から後を書く。圖解一より七まではカミカタトタテグモ、他はトタテグモ、十三は岸上博士の原圖であるが他は皆私の描いた原圖である。



日本産トタテグモ二種 (共に雌)

科学世界, 7(4), 1913付図

1-7, カミガタトタテグモ (現在はキノボリトタテグモに包含されている)

8-12, キシノウエトタテグモ (原図には単にトタテグモとある)

上記13 (岸上鎌吉氏原図) 以外はすべて岸田久吉氏原図

蕃茄なる植物を生じたので氏は之を植物キメラ (Pflanzen chimären) と稱し此の植物に Solanum Tubigenesc と命名した由来キメラ (Chimera) とはギリシヤの神話にある。

怪 獣

で、獅首羊身蛇尾にして火を吐くといふ日本ならば體的な恐しい代物ではあるが、接生といふことはよく表徴して居る。これまで植物にはそんな例がないからウキンクラー氏は古代人空想の動物を藉りたのであらう。このキメラは形態上全く普通の接木を超越して居る所から氏は之を雜種と見做して上記の種名を與へたものであらう、其後バウル氏 (Baer) は或る植物の白色葉を有する雜種を綠色種のものに接いだ時にウキンクラー氏のキメラ以外に其の接著部から生じたもの、葉は表皮と其の下の二層のみ白色で他は皆葉緑を有するものであつたと云ふ、此の場合では一方の形質は他と駢列せず之を被包するのである、氏は普通のキメラを區分キメラ (Sectorial Chimera) 此の方を周縁キメラ (Perichial Chimera) と命

名した。さて次には遺傳問題であるが、區分キメラに於ては接種性を有する側からの種子は接種植物を生じ接臺からは接臺植物を生ずる、周縁キメラに在つては此の關係は不定である生殖細胞を生ずる組織が接種質の層と一致する時には接種植物を生じ接臺層と一致する場合には接臺植物を生ずるのである。要するに接生は接生である、生の連結であつて融合ではない。キメラの種子はキメラを生じ得るものではない。所謂接木雜種の成不成は生理上の問題に非ずして言語の問題である若し雜種の語義を擴張して異なる植物の形質を俱有するものを悉くその範圍に入れ得るならばウキンクラーの主張は承認せらるべきものであらう。

古のキメラは空想若くは理想上の産物であつた、今のキメラは實驗上の創造物である、想像と實現との間には幾千年の距離がある、僅かに幾千年である、眞理の所在は更に遠い、科學者は幾億萬代の後を期して研究の歩を進めねばならぬ、一代の名譽、そも何の願慮する所ぞ。(完)

日本産蜘蛛類 (其二)

岸 田 久 吉

チグモ科 (Atypidae)

チグモ科と言ふ名は *Atypus Latreille* (1804) と言ふ屬名から導かれたもので、一般に通用して居る。故トルム氏 (Thorell) 及その一派の學者は *Calammatoidae*

ける事が出来る、精しい記載は他に書くとして最も學者の注意すべき點を圖で示して置く、此の三つの圖は嘗て他に見ないものである。自分の手許には北は東北地方よりして南九州に至るまでのヂグモの標品があるが能く調べて見るのに相應にかはりがある。けれども先づ一種として置いて可いと信ずる。右來いすくの名を有つて居るが私は標準和名としてヂグモを採り他はすべて異名とする。フクログモ、アナグモ、ネメケグモ、ネメケ

などの名は住居に因み、ヂグモ、ヂクボ、ツチグモは生所に據り、ゲンジグモ、サムラヒグモ、ハラキリグモは習性に發する名と思ふが、ツボツボとかトランジヨとかエグモとか言ふ名は如何なる意味か能く知れぬ、ツボツボに就てはもつとも一種童話じみたものがある様であるが併し語源はどうも知れかねる。

ヂグモ類の住居に就てはエノック氏 (Enock 1885) の精密なる報告があるが、其の要領らしいものが本誌第六卷第七號に出て居るから今更書くには及ぶまい。食物に就ては、エノック氏の外ブラウソ氏 (Osia Brown) シモン氏の報告があ

るが彼等はともちヂグモは住居の中に居て蚯蚓を殺して吸ふものと信じて居るけれども、自分は少くとも日本産の種に就ては研究してみる必要があると思つて居る

〔蟻蟻とヂグモ〕

ヂグモの漢名として蟻蟻を用ふる事は獨り明治の動物學者のみで無く徳川時代の本草學者に於ても殆ど正しいかの様に信せられて居た、併し之は明かに誤謬である、今に於て宜しく改むべきであらう。蟻蟻は一種のトタテグモである、本草綱目に、穴上有蓋、覆穴口とあるに見ても知れよう。

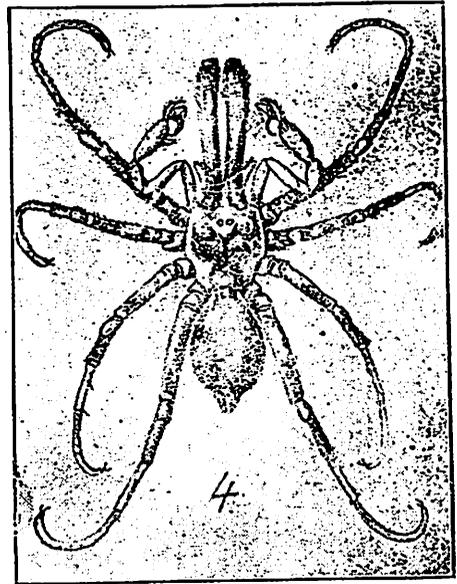
〔ワスレナグモ〕

之はデエニツツ氏が東京で手に入れた標品がもとになつて記載されたがミンヘンの博物館には北日本産の標品があると言ふ。小生の手許にはこの種と認むべきものは一個も無い。唯カルシユ氏 (E. Kanoh, 1879) 及びベールペンベルグ氏 (W. Rosenber) ストランド氏 (E. Strand, 1906) の報告によつて如何なるものか想像して居るに過ぎぬ。記載されたものは雌であつて全長二十一ミリメを算し、内、頭胸部が七ミリメ、腹部が十ミリメ位を占めて居たと言ふ、殘

りが上顎であることは言ふまでもない。背甲、歩脚及觸鬚は褐黄色、腹部上半は黒褐色で、小黃點の曲條があり、下面は褐黑色、蜘蛛は淡黄色を呈して居ると言ふ。其名の通り讀者の注意を永い間惹けば纏ては我等も本種の標品を持得る様になるであらう。

〔ヒメワスレナグモ〕

之は近く Calomnata pumila K. Kishida と命名發表の運びになつて居る。わかり易い様に全體の圖を掲げて置く。全長僅かに四ミリメ半しか無く、しかも上顎が甚だ長い故背甲と腹部と合せた體長は三ミリメに足らぬと言ふ小さい種である。今日まで雄が捕れたわけ故雌が見つければ少しは大きいかも知れぬ。此屬は日本の外スダ諸島及ビルマに分布する東洋地方性のものであるが、近頃アフリカからも一種記載せられた。ヒナワスレナグモは何れと比べても一ぱん小さい。色彩は殆ど全身黒い唯觸鬚の膝節と歩脚の末端とが淡黄色をして居る。圖で見ると觸鬚の轉節が甚しく長い事が目立つであらう、之は本種の一特徴である。又歩脚の跗節が奇妙な形をして居る様に見えて之も多分特徴かと



雄のモグナレスワメヒ (倍九そ凡)

著し。

ヒポキルス科 (Hypochilidae)

Hypochilus G. Marx (1888)

と言ふ北アメリカ産の一屬一種 *Ectatosticta* E. Simon (1892)

と言ふ支那及タスマニア産の一屬二種とから成立つて居る。日本には知られぬ。

本科は肺が二對即ち四個あつて第二對は殆ど腹部下面の中央に在ること、蜘蛛が六個あること、尙其上蜘蛛前對の前方に當つて決して分れざる篩疣 (Cibellum) と言ふ格外の紡績突起を有つて居る事が特徴である。篩疣を有つて居る蜘蛛は本科以外に澤山あるが何種でも篩疣ある蜘蛛は第四步脚の蹠節 (Metatarsus) 乃ち末端から二番目の節に毛櫛 (Calamistrum) と言ふ剛毛群を有つて居る。種類を調べる人は是非覺えて置かねばならぬ事である。

る、けれども其分布は甚だひろい、マダガスカル、東及西アフリカ、地中海地方、アラビア、中アジア、新和蘭、ヒリピン、及び南アメリカに約十七種を見出して居る。

本科の特徴とする所は (一) 背甲の長さが廣さよりも大いこと、(二) 眼が八個あつて近寄つて居ること、(三) 肺が二つ氣管が二つあること、(四) 蜘蛛六個あること、(五) 篩疣は必ず縦に二分して居る事杯である。尙ほ一つことはつて置かねばならぬことがある、それは第四步脚の蹠節に在る毛櫛が基部の所に一寸あるだけであつて、雄に於ては殊に小さく成熟した雄では往々之を缺くと言ふ事である。今日までの所では自分の手へ日本の本科は入つて来て居らぬけれども臺灣の採集が少し行届いて來ると或は日本のプアウナに入らぬとは言へなくなるかも知れぬ。少しく望をかけて居る次第である。

疑はれるかも知れぬが其れは左様では無い、本屬では單に雌雄の鑑別に間に合ふだけのものである。

カポニア科 (Caponiidae)

唯三個の屬を含む、*Caponia* E. Simon (1887) と *Caponia* E. Simon (1891) と *Nops* Mac Leay (1838) がある。第一屬は南アフリカの産、第二第三の兩屬は南

アメリカの産で日本には見つからぬ。此科は肺囊を有つて居ないが氣管の開口として氣門が五つあること蜘蛛が三對あつて前對と中對が一行に並んで居ることが

ヒリスタタ科 (Fristatae)

唯一屬 *Fristata* Latreille (1810) がある



で、往々廢地に自ら生じて居る。葉は稜がある。莖も葉柄も紫色を帯びて居る。花は三寸内外で、淡紫色を呈し、果實は卵形で刺があり、熟すれば果皮が四片に開裂する。今時世間に多く大抵の人は之れをラウセンアサガホと呼んで居るが、それは誤りである。

○シロバナヤウシユテウセンアサガホ ヤウシユテウセンアサガホに酷似して居るが、違ふ主點は其葉も莖も全く綠色で紫色を交えぬ事と、花の白きことである。今時ボツ／＼世間に見へる。

○ヒヨドリジヨウゴ ナス科の多年生蔓草で、莖葉に細軟毛を生ずる。葉は互生し普通に下部に鋸裂片がある。葉柄は往

々他物に一回巻きつきて我莖を支へて居る。花は白く小く、實は球形で赤い。

○タバコ ナス科の品で衆のよく知る所である。

○ハダカホ、ツギ、ナス科の多年生大草本で、莖は粗大綠色葉は廣く、花は短き鐘形で黄色を呈し。果實は下りて球形で赤い。山足の地などに生ずる。

○イラクサ イラクサ科の多年生草本で、イタイタグサとも稱する。其毛に刺さるゝと痛いからである。其毛が人膚に觸るゝ其尖端で刺し次に其尖端折れて其れより出る毒液が瘡口へ入るから甚だ痛い。葉は對生し花は穂となり雌花雄花がある。(了)

日本産蜘蛛類

(其二)

岸 田 久 吉

エレスス科

此科から後に書く諸科の蜘蛛はすべての點に於て似て居ることが目立つ。

エレスス科と言ふ名はユウロッパ、アジア、アフリカ三洲の相近寄つて居る部分に分布して居る所のエレスス屬(*Resus* WAL. GRENÄR) から導いたもので僅かに七屬を含んで居るに過ぎぬ。

東洋地方の産としてステゴディプス(*Stegodyphus* E. SIMON) 及前記エレススの二屬があるけれども日本からは未だ一種も知られて居らぬ、アノリカ州にも亦一種も産せぬ。本科の種は皆小形又は中形の蜘蛛であつて背甲の頭部が隆く、前列側眼は頭部の兩側に陣取り、四つの中眼は(前方に狭き)方形の區域を作つて居る、そして後列側眼のみは是等の眼から遙かに離れて位置して居るから頗る人の注意を惹いたものであつた。

歩脚は強い方で末端に三つの爪を有つて居る、篩疣も立派に備はつて居り少くとも二つにわかれて居り下等なるドレッセルス属 (*Dresserus* E. SIMON) では明かに四つにわかれて居る。本科は今日ではエレスス亜科 (*Eresinae*) 及ベネストムス亜科 (*Pentostominae*) の二群に分たれて居る

チリグモ科

科名はピッカードケムブリッジ氏 (O. PICKARD—CAMBRIDGE) が一千八百七十二年に模式属エウロピウス (*Oecobius* LUCAS) から作つたものである、此科は折々ヒラタグモ科と併合せられる。

眼の排列が少しく異なつて居ると篩疣の存在して居ることによつて區別される位なものであるから致方もあるまい。

特徴 背甲は殆ど腎形で廣さの方が長さよりも大きい。眼は八個あるが排列法は種によつて異なつて居る、併しながら何の種でも各眼は接近して背甲の殆ど中央に位置して居る。

胸板は心形で後方に尖つて居る。篩疣は頂端に於て僅かに二分して居るけれども見方がわるいと分れて居ない様にあやまる事がある。最後に脚疣後對は必ず二節から成立つて居るのであるから實地に鏡檢する時注意すべきである

所屬 属名は二つ三つ作られたけれども今日の學者は皆唯一属に併合するチリグモ属 (*Oecobius* LUCAS) 即ちそれでタラミア (*Thalamia* HENTZ) ヲマヌス (*Omanus* THEURELL) は其異名として取扱はれて居る、アフリカ及アウストリアからはまだ一種も報告されぬが其他には廣く分布して居る。

日本産チリグモ類 自分の見たのはチリグモ (*Oecobius nipponicus* K. KISHIDA) と言ふ一種のみである、此種は白壁の便所の隅などには甚だ多い小さな蜘蛛であつて直径五六分位の不完全な併し緻密な網の下にかくれて居る、素人が見てヒラタグモの子供だらう位に考へるのは大抵此種である、一時自分はチリヒラタグモと言つて居たが茲二三年前からは單にチリグモと言つて居る、塵か間違へられる位故に與へた名である

ヘエゼンベルグ及ストランド二氏の「日本の蜘蛛」にはエウロピウス、ナプス (O. naovus BLACKWALL) と言ふ他の一種を掲げてある、之はシモン氏の蜘蛛の博物學第一卷第一冊にも日本に居るやうに書いてあるのを引用したのであるがどうも誤であるらしい、此の二つの書物は手許に在るけれども斯様な點では甚だ信じ難い。

ゾロプシス科

科名は一千八百七十八年にシモン氏の命名したゾロプシス (*Zoropsis*) と言ふ地中海地方及カナリヤ群島の蜘蛛から導いてある、本科の種はアメリカ、アフリカ、の産であつて先づ日本に見付かる時はあるまいと思はれる

特徴 と言ふべき點は (一) 篩疣が二つに分れて居ること (二) 毛櫛の甚だ短きこと (三) 蹠節及附節に毛總 (*Scopula*) と言ふ毛群のあること及び (四) 眼の排列が一寸ハシグモの様になりかかつて居ること等であらう、唯今では唯一属のアカントタテメス亜科 (*Acanthocteninae*) 及三属のゾロプシス亞

科 (Zoropsinae) の二群から出来て居る。

プセクルス科

今までには日本から捕れて居ないけれども本科の四属は西はセイロン島から東南タスマニア島に至るまでの熱帯諸島及メキシコの産であるから臺灣や琉球からは報告されるやうな事が無いとも限らぬ。

模式屬プセクルス (*Preclerus* THORRELL) はセイロン島からバブア島までに分布して居り私の所謂「らあみ」を張る類である科の特徴は(一)篩疣の二分して居ること(二)毛櫛の短きこと(三)八つの眼がタナグモ流に二列に並んで居ること(四)上顎の縁に齒のあること(五)脚端には著しい齒のある三つの爪があり、前方の二對乃ち前脚は後方の二對乃ち後脚よりも長しこと等である。

ウツグモ科

科名はヒカゲグモ屬 (*Uloborus* LATREILLE) より導かれたものである、ヒカゲグモ科と言ふべきであるが少時從來の通りウツグモ科と呼ぶことにして置かう、ウツグモとは折々ヒカゲグモ屬に入れられるところの數種から成立つて居る一屬乃ち *Syotia* E. SIMON の和名である、ヒカゲグモよりもウツグモの方が素人には目につきやすいから此方を選んだわけである。

特徴 蜘蛛の前方には大きな篩疣があつてエプチナ屬 (*Euina* E. SIMON) とは二分して居るけれども一般には分れて

居ない。肛門突起が頗る長く自立つて居る。それからとちらかと言へば長いと心得るその背甲には縦走する凹みが無い、つまりらぬことの様であるが蜘蛛の分類には背甲上の凹みの方向はやかましいものである。歩脚は他の多くの蜘蛛と異つて第一對が最も長い、なほ第四對の蹠節には長い毛櫛が作られてあり其の上刺も規則正しく生じて居る。

所屬 一般に認められて居るのは七屬であるが人によつてシボタをウロボルスに合して六屬にしようとするけれども一般にアクセプトされぬ。極めて自然的な四亞科にすべられて居る、エプチナ亞科 (*Aebutinae*)、キノゴムス亞科 (*Dinopinae*)、ウツグモ亞科 (*Uloborinae*)、マネギンゴモ亞科 (*Miagrammopinae*) 乃ちそれである。

日本産ウツグモ類

次の九種が報告されて居る。

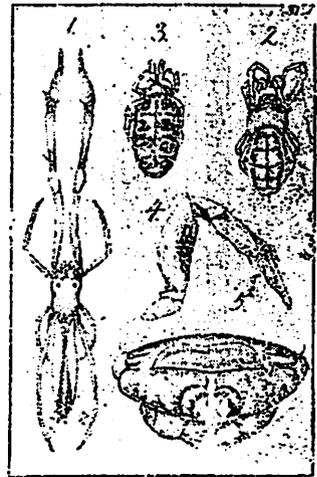
- 一、ヒカゲグモ (*Uloborus defectus* BÖSENBERG et STRAND)
 - 二、和名未定 (*U. dubius* BÖSENBERG et STRAND)
 - 三、和名未定 (*U. incognitus* DÖNITZ et STRAND)
 - 四、和名未定 (*U. prominens* BÖSENBERG et STRAND)
 - 五、和名未定 (*U. sybolides* BÖSENBERG et STRAND)
 - 六、ウツグモ (*Syotia nipponica* K. KISHIDA)
 - 七、マネギグモ (*Miagrammopes orientalis* BÖSENBERG et STRAND)
 - 八、アフギグモ (*Hypphotes montanus* K. KISHIDA)
 - 九、キウシウアフギグモ (*H. affinis* BÖSENBERG et STRAND)
- 一から五までは九州の産、小生の見たのは一だけである。
 六は九州四國及本土の産、七は九州及本土、八は本土の産、九は其和名の如く九州の産である、ウツグモ類は一體に素人

の注意を惹かぬ故充分に採集されて居ない、分類上一から六まではウツグモ亜科、七から九まではマネキグモ亜科に編入される。

ヒカゲグモ 體長三・五ミリメばかりの小さい蜘蛛であつて同属中の最大なるものと雖も五ミリメを越ゆることは尠い同類のもの皆「まるあみ」を張る。まるあみと言ふのは網を構成する絲が二いろあつて一つは同一中心から放射状に而かも略同一平面上にひろがつて縦絲となり一つは之を横に締約して横絲となつて居るものである、精しく言へば可なり部分と種類があるけれども茲には言はぬ。ヒカゲグモの同類は此のまるあみを作るのである、けれどもヒカゲグモ類のまるあみは容易に他の種類の種が作るものと區別することが出来るそれは大抵網を水平に架けて居ると日蔭に多いのと次には少しくこみ入つて横絲がカムストック氏(JOHN HENRY COX-STOCK, 1912)の所謂 hatched band であるからである、序ながら一般に蜘蛛は個體生活をするにきまつた様に信せられて居るがシソガボール産のヒカゲグモ(Uloborus suffragi E. SIMON)やベネズエラ産のもの(U. republicanus E. SIMON)などは明かに社會生活を行ふと言ふ事實が知られて居る。

ウツグモ ヒカゲグモに似て居るが鏡下で眼を見るとヒカゲグモは眼域は長く前列中眼か後列中眼が大きい、此のウツグモは眼域は長くなく前列中眼は後列中眼よりも小さい故すぐに區別がつく。

マネキグモ「招き」の意味である、網に居る時その大形な第一歩脚を動かすのを見ると何者かを招いて居るかの様に考



かである。

アフギグモ

イギリス語で「Triangle Spider」と言ふ類である、石川博士の進化新論かに「三角ぐも」とあつたのがそれである。實に面白い蜘蛛であつて縦絲四本横絲九本許りの扇子形の所謂「あさぎあみ」を張り要に近き絲に居り絲を手繰つて居てピンピン弾く様にして敵の難をのがれる、自分の郷里の山間に多いが今まで案内をして實驗しつゝ説明をしてあげた人で奇妙ですと感心しなかつた人は一人も無い、茲に珍妙な其の一組の雌雄を描いて御覽に入れよう。

圖解 一はマネキグモの雌、二から五まではアフギグモ二は雄、三は雌共に成熟したもの、四は三の右の第四步脚蹠節に毛櫛が美しく生えて居るのに注意せられよ、五は三の篩疣と蜘蛛但し中對と肛門突起は見えぬ、皆小生の原圖

◎前號誤植訂正◎

二十七頁下段一一行ツツイナゴはツチイナゴの誤植。「動物植物標本」三十行上段一七行シベリアンはシベリアンの誤植。下段一〇行真好がは真好での誤植。一三行シブリアンはシベリアンの誤植。一六行接登は接登の誤植。二〇行モウ一〇はモウ一つの誤植。

愛すべき狐を記して其毛皮に及び餘りに其利用しやうとしたのは狐に對しては氣の毒である、毛皮を得る爲めに飼ふた外に狐を飼つてよく順らしたならば愛すべき家畜となる事は動物園の狐を見ても分かる、殊に紅狐は愛すべき顔である、しかも兒から飼つたものはよく順れる者である、只其臭氣は多少の缺點である。

此の臭氣は狐にとつても餘り有利のものでなく獵犬に追はれた時に其臭氣の爲めに如何にしても免がれる事が出来ない狐も自身此を知つて、高い懸崖を飛び下り川を渡つて足跡の臭を消す事に勉めるけれども目的を達する事は少いと云ふ。而して此の獵犬で狐を追ふ事は外國では愉快な遊獵として算へられて、狐狩と云ふ事は面白い話題となるのである。狐の狩獵は此の外種々あるが茲には略さう。

前に記した様に北海道までは他の種類の狐が居るが本州以南には只日本狐の一種である、しかも其の狐は四國には居ないと云ふのは大和本草以來の説である、然し今日は四國にも多少居る、其について、是を明治の初年に稻荷の信者が大阪

日本産蜘蛛類

(其四)

岸田久吉

ハグモ科 (Dictynidae)

ハグモと言ふ和名は私の命じたものであつて葉に居る蜘蛛

から輸入したと云ふ説を或本で見たが事實かどうかは知らない、又他の種類が東北地方に居たのではないかとも思はれる其は橋南溪の東遊記に『奥州の内にて黒き狐を見たり上方には無きものなり蝦夷地には有るよし兼て聞けり純黒なる狐の皮は尤珍重する事なり我見たりしはあまり見事なる黒色にてはなかりし』とあり黒狐か十字狐ならんと思はる、本草綱目譯義にも『近年奥州カラ黒狐皮ノキタルアリ松前ヨリ黒白交ル狐皮來ル會津ヨリウス黒ノ皮モキタル』と記せるも前と同様なり、或は蝦夷より輸入したるものかは知らねども此の文にては黒狐の東北地方に産せし様に思はる、殊に會津よりウス黒の皮來ると云ふは十字狐の黒淡きものとも思はる、千島にても黒狐は他の紅狐又は十字狐の爲めに漸次其地域を狭めらるゝと云へば東北地方にも多少さる事のありしにあらずやと思はる、然し彼の續日本紀に出た靈龜元年正月甲申朔遠江國獻白狐、とか養老五年正月戊申朔甲斐國獻白狗の類は地極狐にあらずして白鹿白雉の類と同じく普通の狐の白化せるものと思つて可いであらふ。(完)

と言ふ意味を有つて居る、*Dictyna C. I. SUNDEWALLI* のためには適切であると信ずる。科名は此屬名から作つたものである。

特徴

(一) 節疣は唯壹個であるか又は貳分して居ること、
 (二) 背甲の中窩は必ず存在して居り縦走すること、(三) 上顎の外側基部に近く外髁 (Lateral condyle or Basal macula) と言ふ特別に突出した光澤部を有つて居ること、(四) 眼は六個又は八個で二列にならんで居ること、(五) 歩脚の末端には爪が參個あつて毛總 (Scopula) を缺いて居ること杯である。

所屬 小生の認めて居るのは貳拾六屬であるが今少しく研究が進んだならば此數は減少することと思はれる。今までに亞科を作つたものは無かつたが私は節疣の形態を標準にして二類にわけた、一はアマウロビウス亞科 (Amaurobiinae) 他の一はハグモ亞科 (Dictyninae) である。

日本産の種類

左記の十一種が知れて居る。

- 一、和名未定 (*Tawougia kinshana* K. KISHIDA)
 - 二、ネロングモ (*Dictyna feis* BÖSENBERG et STRAND)
 - 三、ミドリハグモ (*D. foliicola* BÖSENBERG et STRAND)
 - 四、ツクシハグモ (*D. maculosa* F. KARSCH)
 - 五、チャボハグモ (*D. procerula* BÖSENBERG et STRAND)
 - 六、タカノグモ (*Thalimetus nipponicus* K. KISHIDA)
 - 七、オホタカノグモ (*T. rakuhoi* K. KISHIDA)
 - 八、カレハグモ (*Lathys annulata* BÖSENBERG et STRAND)
 - 九、和名未定 (*L. novembris* DÖNITZ et STRAND)
 - 十、和名未定 (*L. ocellata* BÖSENBERG et STRAND)
 - 十一、和名未定 (*L. orientalis* BÖSENBERG et STRAND)
- 一だけはアマウロビウス亞科に屬するものであつて節疣が二分して居る、よく外國の書物に出て居る所の *Amaurobius*

(KOCH: 183) と言ふ屬に近いものである。二から十一まではハグモ亞科のものであつて節疣は決して分れて居ない。以前の分類學者のハグモ屬なるものには節疣の分れたものをも含ませてあつたが小生は斷乎他に移してしまつたのである、自分の意見では節疣の如き器官は甚だ重要な標準であつて、少くとも他の人々が歩脚端の毛總などを重要視する以上に考へて居るのであるから致方も無し。

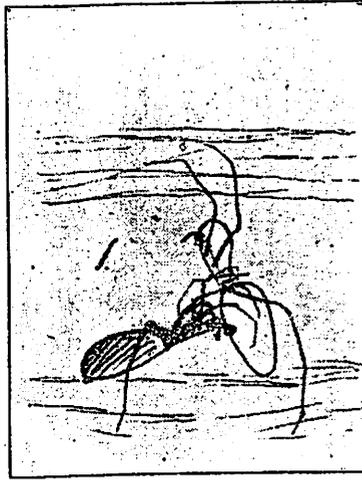
ハグモ

先づ屬の特徴をあげてみると頭部は丸味を帯びて中凸になつて居る。前列の眼は端直な線上に殆ど等距離に排列して居り中眼が側眼より小さいこともあるが大抵各眼略同大である、後列の眼は少しく前曲な線上に排列し各眼廣く離れて居る、小さいけれども同大である。四つの中眼を作つて居る所謂中眼域の形は多少變化があるけれども長さが廣さより大きいことは斷じてない。下唇は鈍頭、長い方である。胸板は後方で第四對の歩脚は基節間にのみり出て居てひろいから注意を惹く。節疣のことは前項に記したとほり、さてハグモ類のものはいろ／＼の所に網をつくるが皆一種異様な網であつてテントとでも言へば可いかも知れぬ、葉上に居るものは葉縁をそばめて弓形にし、此網を弦狀に張つて其の下に居る。また其網を作つて居る絲が鏡下で特異な觀を呈するものである、茲に詳論せぬけれども讀者諸君は枇杷の葉などに居るハグモの網を取つて研究されることを望む。

タカノグモ

此和名は私の生れ故郷なる高野村を記念すべく命じたものであるが其最初の發見地も亦實に此の愛すべき一小村である。タカノグモ屬乃ち *Thalimetus* E. SIMON

(Sog)は小生の發見種を得るまでは南アメリカのベネツエラ産の一種だけしか含まなかつたものである。甚だハグモと近い種類であつて著しい區別點は後列の眼が後曲な線上に排列して居り中眼間は中側兩眼間よりも大きいことである。オホタカノグモは京都市内で採集したものでその種名ラクホイは蟲譜圖說の著者の雅號をラテンの形容詞化したものである。



雌は雄より僅かに大いだけで先づ兩性共ニミリメ位のものである、雌は第四步脚で體を支へて立ち第一第二の兩歩脚で上のテントの綱絲をにぎり第三步脚で雄をいだいて居る、また雄は第一から第三までの三對の歩脚で雌につかまつて居り第四步脚で體を支へながら一方の觸鬚だけでさへ二十分以上雌の生殖門に接する。先年モンゴメリ氏(Moore)はハグモで交接の有様をしらべ、兩性は綱を打ちながら數回前後に移動した後交接すると言ふ事實を見たが自分は不幸にして交接の豫備たる求婚行爲(Courship)を知ることが出来なかつた。

昨秋東京市でも他の一種を見付けたけれども歸途荷物の中で紛れて失つてしまつた、まことに遺憾なことである。模式的なタカノグモでは數回雌雄の交接するのを見たらから大略その様子を述べてみよう

雌は雄より僅かに大いだけで先づ兩性共ニミリメ位のものである、雌は第四步脚で體を支へて立ち第一第二の兩歩脚で上のテントの綱絲をにぎり第三步脚で雄をいだいて居る、また雄は第一から第三までの三對の歩脚で雌につかまつて居り第四步脚で體を支へながら一方の觸鬚だけでさへ二十分以上雌の生殖門に接する。先年モンゴメリ氏(Moore)はハグモで交接の有様をしらべ、兩性は綱を打ちながら數回前後に移動した後交接すると言ふ事實を見たが自分は不幸にして交接の豫備たる求婚行爲(Courship)を知ることが出来なかつた。

カレハグモ

體色の枯れ葉に髣髴たるが故に得た名である。前列の眼は一直線上にひつゝき合つて排列して居り中眼は側眼よりも小い。後列の眼は少しく後曲なる線上にならび全く同大である。中眼域は折々長さが廣さよりも大であるが其反對な場合はない。それから側眼同士は殆ど接着して居る。之だけ書いて置けばハグモやカタノグモと區別が出来やう。

ヤマシログモ科(Scytodidae)

科名はアウストラリア以外に汎く分布して居るヤマシログモ屬乃ち *Scytodes* Latreille (1804) から導いたものであるがシモン氏及其一派の學者は南アメリカ及南アフリカに産する *Scytarus* Walckenaer (1847) から *Scytodidae* と言ふ科名を作つて用ひて居る。どちらも可なり用ひられる故に臆してゐなければならぬ。

特徴 (一)背甲に中窩を缺くこと、(二)胸板と下唇とが癒着して居ること、(三)肺の氣門が二個而して氣管の氣門が唯壹個であること、(四)決して篩疣を有たず、その代りに以後に來る諸科と共に間疣(Coilus)が能く發達して居ること、(五)唯一屬 *Plectreurys* E. Simon (1893) は八個の眼を有つて居るが他は皆六個であること採。

所屬 唯八屬であるが六個の亞科に分れて居る。プレクトレウリス亞科 (*Plectreurinae*)、ネリエトプス亞科 (*Lorigodinae*)、シカリウス亞科 (*Sciarinae*)、イトグモ亞科 (*Toxoscelinae*)、ヤマシログモ亞科 (*Scytodinae*)、ドリムサ亞科 (*Drymusinae*)、乃ちそれである。

日本産の種類

左記の二屬三種だけがわかつて居る。

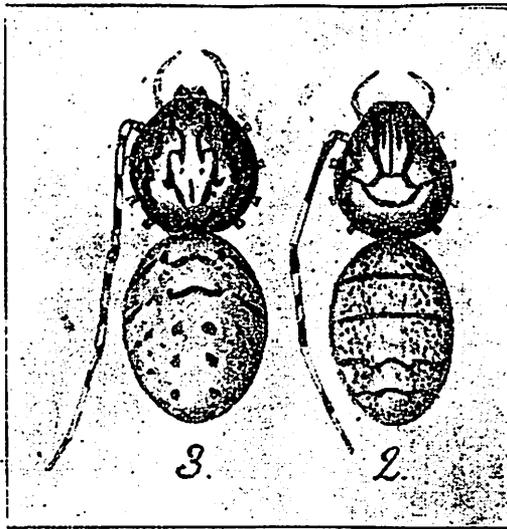
一、イトグモ (*Laroscels rufescens* L. DUFOUR)

二、ヤマシログモ (*Scytodes nigrolineata* F. SIMON)

三、ユカタヤマシログモ (*S. thoracica* LATREILLE)

イトグモ

糸蜘蛛の意味で歩脚のほそいことから思付いてイトアシグモと言つたのを略稱して居るのである。ヤマシロ



グモ屬とちがつて背甲は低平で決して高くなつて居らぬ、日本では九州と四國とに産する十ミリメ内外の纖弱な蜘蛛である。其網は可なり大きな不規則な物であつて糸は篩疣を有つて居る蜘蛛のに酷似して居る、そこでシモン氏の如

きは間疣は篩疣と異體同官であるかも知れぬと言つて居た。後に發生學上の研究が盛になつて此問題を解決することになつたが其次第一を一々茲に書くわけにはいかぬ、唯結論めいた所を言へば蜘蛛篩疣間疣はヤボロウスキ氏 (A. JAWORSKI 1894) の報告した通り第四第五の腹節上に發するもので、篩疣間疣はブラックウォール氏 (J. BLACKWALL 1839) による

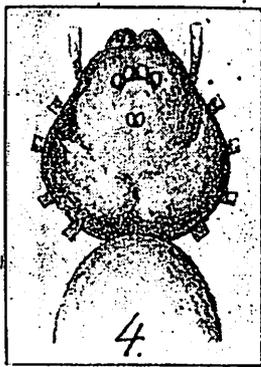
(F. DAHLGREN) の書いた如く同體異官と考へねばならぬことになつたのである (此の部分モンゴメリ氏一千九百九年の論文に據る)。そこでまたヤマシログモ科の分類上の位置が確實らしくなつた。

ヤマシログモ

和名は私が京都に居た頃にはじめて採集した故山城を記念するために命じたのであつて決して山に居る白い蜘蛛などと言ふ意味は持たぬ。標品によつて褐色の地に横條のあることがあり或は全身濃紅褐色のことがある、どちらにしてもイトグモと異なり必ず背甲が半球狀に高くなつて居る。ユカタヤマシログモと共に圖を出して置く。

マンシログモ科 (Leptonetidae)

特徴 (一) 小さな點狀ではあるが背甲には必ず中窩があること、(二) 胸板と下唇との界は明瞭であつて決して癒着して居らぬこと、(三) 眼は無いが又は必ず六個なること、(四) 上顎の前縁に齒のあること、(五) 間疣のあること、(六) 肺氣門二つ、氣管氣門一つあること等。僅かに六屬だけであつて大多數は皮膚の暗色な毛の



少い蜘蛛で其歩脚はほそくて長い、洞穴や森林中の濕つた場所に生活する。

日本産の種類は唯 マンシログモ (*Leptoneta japonica*)

一種だけである (F. SIMON) 一種だけである横濱でトロンテ氏 (A. Mell.)

otte) の得た標品が基本になつた。背甲は中凸が長い方では無い、前列の眼は前曲な線上に排列し、後列の眼は互に接近しながらも前列の眼から遙かに後方に遠いので位置して居る下唇も決して長い方では無い、胸板は廣い心形で後方には短く尖つて居る。和名のマシテは言ふまでもなく猿の意であるが深い、はれのあるではなく、唯森林の住者と言ふ心で私の命じたものである。

ヒリピンには *Psiloderes E. SIMON (1892) ?* *Neotoma E. SIMON (1892)* などがある、南日本を能くしらべたならば或は見付けられるかも知れん。
次はタマゴゴモ科から後を書く

圖解 一はタカノグモの交接するところ、寄生菌を其のまゝ、二はヤマシログモの雌、三はニカタヤマシログモの雌、四はマシラグモの雌の背甲 (皆小生の原圖)

水蠱の特殊生活

深井武司

水蠱とは云ふ迄もなく蜻蛉の幼蟲であるが、此幼蟲は水中に生活するもので、河川沼湖等が彼等の住家であると云つてよいのである。然るに南米コスタリカ及メキシコ地方にはプロメリアド (Boerhaavia) と云ふ、之れは鳳梨の科の寄生植物であるが、此植物の葉の基部に集まる少量の水分に生活してゐる水蠱がある。此事に就て米國のカルバート博士の實見説を簡単に御紹介致そうと思ふ。プロメリアドは濕潤の地に産するもので、ボロ (學名 *Erythrina*) と云ふ樹に外部寄生をしてゐる、カルタゴ附近に

澤山あるプロメリアドは葉とも五乃至拾吋位のものである。之等は多少水分を含んでゐるので普通昆蟲の宿になる。コキブリ類が特に宿る。併乍ら千四百五十米突の高處に於ては未だプロメリアドに水蠱も宿つて居らなければメシストガステルも見ない。

プロメリアドの最大なるものは葉とも三呎もあり、千四百五十米突位高所の附近の林にあるがカルバート博士の見られたのは、水蠱及メシストガステルとも干米突の處よりも低い處であつたそうなる。此植物の葉は短い幹から出てゐるので、基部は寄合つて居て葉身も亦密接してゐる。そして一の寄主の周圍に幾株も寄生してゐるので株の區別が出来ないような有様である。葉は先端に至つて細まつてゐて、互に分岐して頑固に全葉を延長せしめてゐる。或は先端だけ少し下向してゐる。葉が剛直なものと葉縁に刺立つてゐるので無矢味に觸れると手を痛める、そして寄生せる點も地上一呎より五十呎の間迄だと云ふ。

そう云ふ植物であるから採集するには拾五呎よりも高くないのを見つけて繩を懸けて引き落とし、外葉から順次注意して

石灰及び二硫化炭素を用ひて土壤殺菌を行へばある程度までは有効である。

以上は植物の細菌病中最も普通なるものに就いて述べたのであるが、此の他瓜類の青枯病、山葵の腐敗病、蓮根の腐敗病、桑のバクテリア病なども往々其の發生を見る所のものである。

一般に細菌病は動物のそれの如く甚だ蔓延し易い、又病勢の進行は甚だ急激である、誘因では水濕と溫熱は最も優勢である、故に溫暖で降雨の多い年には此の種の病害の發生を豫期せねばならぬ。細菌の侵入は多くは傷痕からするのである

昆蟲の咬痕、風に揉まれた擦傷などがそれである、極小なる細菌の入口であるから肉眼で見ることの出来ぬほどの微細な傷痕からも侵入し得るのである、故に諸種の入手の際にも植物の葉其他の部分に傷めぬやうに注意せねばならぬ。又た一般の豫防法としては、圃地に過多の水分を保留せしめぬこと、被害圃には數年間他作物を栽培すること健全なる種苗を選択すること、密植を避けて光線空氣の透過を良好ならしむること、害蟲を驅除することなどが最も必要である。

(完)

日本産蜘蛛類

(其五)

岸 田 久 吉

タマゴグモ科 (Onopidae)

特徴 (一)背甲の中窩を缺いて居ること、(二)眼の六つあること、(三)各歩脚の基節は殆ど同大であつて略球状なること、(四)歩脚末端には爪が二つしかないこと、(五)肺の氣門二つの外氣管の氣門が必ず二つあること等。

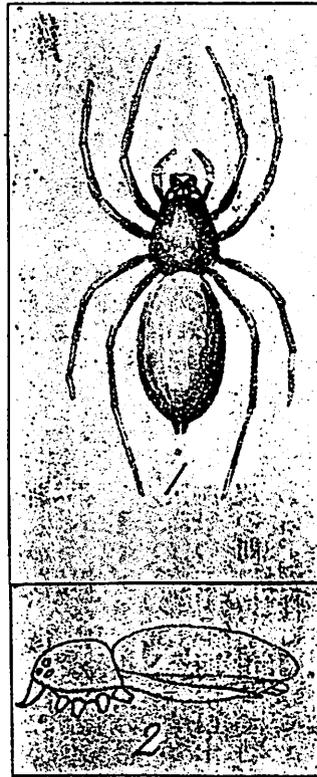
所屬 十八屬、之を腹部の皮膚が普通の蜘蛛の様に柔軟であるか或は特別に硬い部分があるかに據つて二つの亞科に分ける、どちらにしたところで甚だ微細な蜘蛛であつて二ミリ

メ内外である、二つの亞科ともに日本に産する、一つはタマゴグモ亞科 (Onopinae) は腹部の皮膚は尋常である。一つはダニグモ亞科 (Gamasomorphae) は此亞科のものが腹部に硬い部分を有つて居るのである。

- 一、タマゴグモ (Onops corticalis. Bösenberg, et strand)
- 二、ダニグモ (Gamasomorpha cataphracta Karschi)
- 三、ケテリダニグモ (G. karschi Bösenberg et Strand)

タマゴグモ 背甲の模式的に卵形なために命じた名であるが日本(九州)産のものは腹部の色も卵色故兼ねて面白い。世界的な属であるが何分體が小さいのと落葉などの下に居るのとで採集者の注意を逸し易い。背甲は其名の如く卵形で後方に高くなつて居る。眼は其の前方に廣く場所を占めて居る、前列は二眼だけであるが後列は四眼であつて前曲な線上に排列して居り、其中眼はひとつ、きあつて居る。胸板は廣い心形であつて後方に鈍形である。

ダニグモ 之はラテン名の意を掬んで命じた名である。属はカルシユ氏(1882)がデエニツ氏の肥前で採集した標品をタイプとして作つたものであるが、同じ九州からも他の一種(ケブリダニグモ)が見出された様に東洋地方の諸所アラビア及新世界でも発見せられて今は大きな属になつた。茲には説明を略してカルシユ氏の原記文中の圖を出して置く。



(圖原)雌のモグゴマタ (1)
皮の部腹雌のモグニダ (2)
注にるあ分部の頤に膚意
よれらせ

イセルリング氏以後あまり學者の手に研究されないからでモン氏などは一千九百三年の蜘蛛の博物學で存在をすら疑つて居る程である。一見ダニグモ類(タマゴグモ科を見よ)に似て居るが、(一)眼は背甲の中央にあつて八つあり、そして前列は前曲後列は後曲であつて、前列中眼は相遠さかり、兩列側眼は極めて近寄つて居りながら、後列中眼とは極端にはなれて居るので排列の仕方が先づ誰にも眼につく、(二)胸板は甚だ大きく三角形であつて尖りの後方にあることは言はずも知れて居る、(三)腹部下面の硬い皮膚は三片になつて居り、(四)蜘蛛はわづかに四つだけである。

キノシシグモ科

(Dysderidae)

ハドロタルスス科 (Hadrotarsidae)

ハノア島産の Hadrotarsus T. Thorell(1881)とシドニイ産の Gnogala Keyserling (1890)との二属から成立つて居る小スソ科であつて學者の注意を惹いて居る、それはトルル氏が

らかと言へば平坦なるに近きこと及中窩のあつても極微なること、(二)眼の六つあること、(三)前二對の歩脚の基節は他のものゝと異なりほそく柱状をなして居ること、(四)歩脚末端には爪基 (onychium) 無く二又は三爪を有つて居ること、(五)肺の氣門二つ氣管の氣門二つあること等。

所屬 主として温帯に産する蜘蛛であつて十一属を算するが之れをキノシシグモ亞科 (Dysderinae) とホンマダグモ亞科 (Segestrinae) の二類に括る。

日本産の種類 左記の三屬五種、一の外は皆第一亞科。

一、キノシシグモ (*Dysdera crocata* O. Koch)

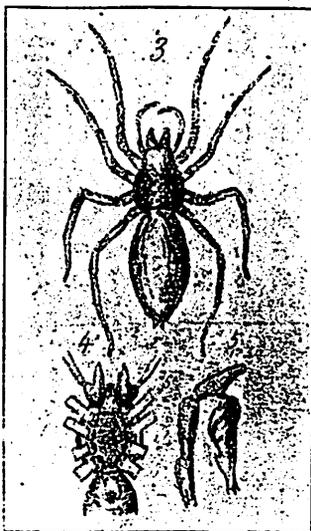
二、エンマヅモ (*Segestria nipponica* K. Kishida)

三、ツグシエンマヅモ (*S. senoculata* Linnaeus)

四、ミヤヅモ (*Ariadna lateralis* F. Karsch)

五、ロミヤヅモ (*A. orientalis* Dönitz et Strand)

キノシシグモ 野猪蜘蛛の意此種は分布頗る廣くエウロツパの南部及西部、九州、ハワイなどから報告せられて居る。キ



雌のモグ、シノキ(3)
面下部前の其(4)
あ色特。球接交の鬚觸の雄(5)
よれらせ意注に形状の其る
(圖原て線)

ノシシグモ屬の著し點は二つある。其の二つは胸板の縁が襪の様になつて歩脚の基部を取圍んで居ること、他の一つは雄の觸鬚の球が一種特別な形をして居ることである、其説明をしやうと思へばどうしても専門の語を用ひなければならぬから他日に譲る。尙ほ此屬の蜘蛛は大抵石の下やけの間などに居るが住居は卵状のおしつぷしな様な密な組織の囊であつて雌が産卵するにも決して卵囊を作らぬさうである(シモン氏に據る)。

エンマヅモ 自分が此種を探つたのは明治四十一年の三月十五日であつた、採集した場所は京都府師範學校の舎内であつてストロブのある暖い室で顕微鏡下で他の蜘蛛をしらへて居る時天井から絲を曳いて下つて来た唯一足の雄だけである概形は口繪で見るとほり故説明は省略する。名は冥府の大王閻魔を取つて自分が命じたものである、閻魔が亡者の獄を斷じて殿に罰を行ふ様に學界の弊風に就ても當時希望する所があつた故に斯様な名を取つたのである。ツグシエンマヅモは九州の外ヨウロッパにも廣く分布して居るが雄は七ミリメもあるから、僅か四五ミリメのエンマヅモとは容易に區別し得る。因みにエンマヅモ類は皆卵囊を作る。

ミヤヅモ 小生の最初採集した所がお宮であつたから命名したのである、そのお宮とは丹後加佐郡丸八江村八田の松尾神社のことで明治四十三年の十二月に境内のカウヤマキの樹皮の間に袋を作つて幼仔と共に生活して居るのを取つたのである。習性に關してはカムストック氏(J. H. Comstock, 1912)の Spider book. (pp. 303-322) 及モンメリ氏(1909)の報告(pp. 500-553)に詳しうことが出て居る、之も他日に割愛する。

イウレイグモ科 (Pholcidae)

これから後の科は氣管の氣門は唯一個である。イウレイグモ科では氣管は殊に甚だ簡單で、ダール氏(Friedrich Dahl, 1883)の如きは是だけの理由で Pholciellidae と呼んだ位である、一般には氣管は無いかの様に思はれて居るがトダグモの如きを鏡下で見るとどうも氣管系の氣門もあるやうであ

る。イウレイグモをヒメグモから分けて一科としたのはツエ、ユツホ氏 (O. Koch, 1850) である。

特徴 (一) 背甲の内、頭部は小さいが二属の外頭溝によつて胸部と區別されて居ること、(二) 中窩は二属(には無いが)を除き、大きな縦のがあること、(三) 眼は八個又は前列中眼を失うて六個であり、失はるべき眼の外ものは三つ宛近よつて左右に別群をなして居ること、(四) 歩脚が極端にほそく長く且又末節には折々ザトウムシ (Phalangidea) の様に偽節がたくさんあり、末端には必ず三爪あること、(五) 多くは下顎が曲つて下唇の前に出て居ること等。

所屬 二十三属あつて二つの亞科に括る。亞科の區別點は主として中窩の存否であつて、存する方はイウレイグモ亞科 (Pholcinae) と言ひ無い方をシモングモ亞科 (Nineticinae) と稱へる。

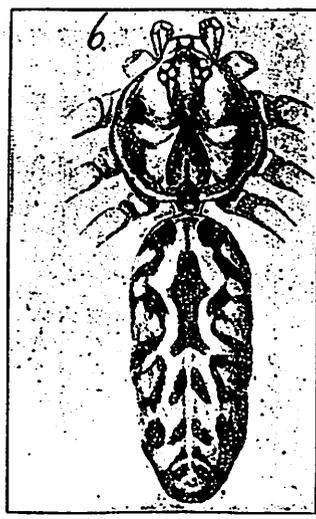
日本産の種類 左の三属三種。

- 一、イウレイグモ (Pholcus crypticolens Häseler et strand)
- 二、トダグモ (Smeringopus todai K. Kishida)
- 三、シモングモ (Simonius typicus K. Kishida)

檢索表

- 一、中窩がある……………シモングモ
 - 中窩は無……………トダグモ
 - 二、中眼域は長さが大きい……………トダグモ
 - 中眼域は長さは廣さより小さい……………イウレイグモ
- イウレイグモ北は東北地方から南は九州に至るまで(四國にも)廣く分布して居る。家の隅や天井裏の様な餘り強く

ない光のあたつて居る處に不規則な網を作つて生活して居る、時には森林中の薄暗い處にも居る。體長は四乃至六ミリノ位が普通であるが歩脚は甚だほそく且つ長い、殊に雄に於ては甚しい。全身暗褐黄色で背甲の中央及胸板に淡き黒斑がある。全身の様子から「幽霊」と言ふ和名を與へたのである。歩行のときには小さい其體をすらいとも重げに運んで居る。卵は卵囊に容れず僅かな糸でからんで下顎に著けて持歩く。ヨウロンハ産の一種 (Ph. phalangoides Trassler) との差異は甚だ小さい様に思はれるが少特別種として置く。



(圖原) 雌のモグダトの産島繩沖(6)

したものである。此属は全世界の熱帯に汎布して居り最普通な種は Smeringopus elongatus Vinson (1863) と言ひ、熱帯アフリカ、アンダマン群島、ヒルマ、インドなどに居るが、トダグモは之に甚だ近い種である、併し腹部背面の斑紋に於ても將又生殖器に於ても異なる故に別種とした。(記者曰く、蹄面の都合にて、今一種シモングモの記載は次號に譲ること、せり。之を諒せよ)

日本産蜘蛛類

(其六)

岸田久吉

シモンズモ フランスの大學者シモン氏に捧げた名である。屬名をシモニウスと命じて發表したが餘り立派ではなかつた。それはフクログモ科に同一語源のシモニヌス (*Simonus Tziema* 1881)と言ふのが既に作られてあつて紛はしうからある、併し目下シモニヌスは *Ctenomma Thorell*. (1890) の異名として取扱はれて居り實用上に故障は無しからシモニウスを保存して置く。

シモンズモは丹後の産で多くは押入れの如き場所に居る。大形な標品でもニミリメを超えない。頭薄は有るけれども中窩は必ず缺いて居る。日本特有の、そして、又、日本産イウレイグモ科中唯一つの六眼の蜘蛛である。

コガネグモ科 (Argiopidae)

小生のコガネグモ科は從來の諸學者によつてヒメグモ科 (*Theridiidae*) と稱せられて居た類をも含むがために甚だ大きな科である。斯様な大ない科を許すことは他の科との比較上時々面白くないのであるが併しコガネグモ科とヒメグモ科とに分けて置くのは一層不自然であるから、當分のところ已むを得ぬ、但し之をコガネグモ科とヒメグモ科と言ふ二つだけ無く多數の科に別つことは差支無しと思ふ、他日或は

う言ふ風にする時が来るかも知れぬ。

所謂コガネグモ科は今迄にも若干の學者には三四の科として取扱はれた事があつたのと屬のラテン名に就て議論が盛に起つて居たのとで異名が甚だ多し。一寸思出づるゆゑを書して次の九つ位はある。Epeiridae, Euerioideae, Gasteracanthidae, Linyphiidae, Micryphantidae, Pachygnathidae, Tetragnathidae, Tetragnathoidae, Theridioideae などとは言ふまでもなく主要なるものだけである。

特徴 (一)間疣の存在すること、(二)歩脚の末端に三個の爪があり、時には鋸齒の有る毛が生えて居るけれども決して毛總を有つて居なること、(三)眼は四個六個又は八個あること、(四)上顎は齒の有無に拘らず強いこと、(五)肺氣門二つ、氣管氣門一つあること等。

所屬 小生の認めて居る屬の數だけでも二百を超過する毎年々々若干宛の新屬が追加されて行く現状故三百五十屬に達するのも遠き將來の事ではあるまいと思ふ、今之を五つの亞科に括る。(一)ヒメグモ亞科 (*Theridiinae*) (二)サラグモ亞科 (*Linyphiinae*) (三)アシナガグモ亞科 (*Tetragnathinae*) (四)チモラウグモ亞科 (*Nephiinae*) (五)コガネグモ亞科 (*Argiopinae*) 即ち夫れである。左に其檢索表を出して置く。

一 上顎に外腺が有る(多少退化的なるものもせよ)……………三
上顎に外腺は無S……………11

二 歩脚第四對の附節には下稜を曲つた齒がある大S
毛が一行を爲して居る……………ムキムキ亜科

三 歩脚第四對の附節は尋常の毛があるだけサシムキ亜科
生殖板を劃する横溝は明瞭である……………四

四 生殖板を劃する横溝は不明瞭……………ムキムキ亜科
下唇は長ろの方が大である……………ムキムキ亜科
下唇は廣ろの方が大である……………ムキムキ亜科

日本産の種類 現今四十九屬一百九十三種は確實に記
載せられて居り尙小生の手許で目下研究中のものが二十種許
りはある。尙ほ種數は當分増加する一方であらう。屬名を擧
げ種數は數字を以て括弧内に記入する。左の如くである。

ヒメズミ亜科拾五屬

- orell 1880, 2) ロムクム (Rhomphaea J. Koch 1872, 1) キキムクム (Argyrodus E. Simon 1864, 6) ユムクム (Epinus Latreille 1809, 2) ムムクム (Euryopsis Menge 1868, 1) ムムクム (Theridion Walckenaer 1805, 22) アムクム (Achaea O. Pickard-Cambridge 1882, 1) ムムクム (Theridula Jemerton 1882, 1) ムムクム (Dipocna Thorell 1870, 6) ムムクム (Stearodea F. Cambridge, 1902, 1) ムムクム (Teutana E. Simon 1881, 1) ムムクム (Lityphantes Thorell 1870, 4) ムムクム (Asagena Sundevall, 1833, 1) ムムクム (Enoplognatha Panesi 1880, 4) **ホムクム**

hida 1912, 1) ムムクム (Ceratinella Emerton 1882, 1) ムムクム (Diplocephalus Berleau 1888, 2) ムムクム (Caracladus E. Simon 1884, 1) ムムクム (Gonatum Menge 1866, 1) ムムクム (Oedothorax Berleau 1888, 6) ムムクム (Erigone Audouin 1825, 5) ムムクム (Hypselistes E. Simon 1894, 1) ムムクム (Nematognus E. Simon 1884, 1) ムムクム (Solenysa E. Simon 1894, 1) ムムクム (Microneta Menge 1868, 3) ムムクム (Syedra E. Simon 1884, 1) ムムクム (Labulla E. Simon 1894, 1) ムムクム (Linyphia Latreille 1804, 9) **ムムクム**

十屬 ムムクム (Pachygnatha Sundevall 1823, 2) ムムクム (Tetragnatha Latreille 1804, 7) ムムクム (Meta O. Koch 1836, 6) ムムクム (Leucauge White 1841 = Argyropeira Emerton, 5) ムムクム (Tylorella E. Simon 1894, 2) ムムクム (Mormonops E. Stenard 1906, 1) **ムムクム**

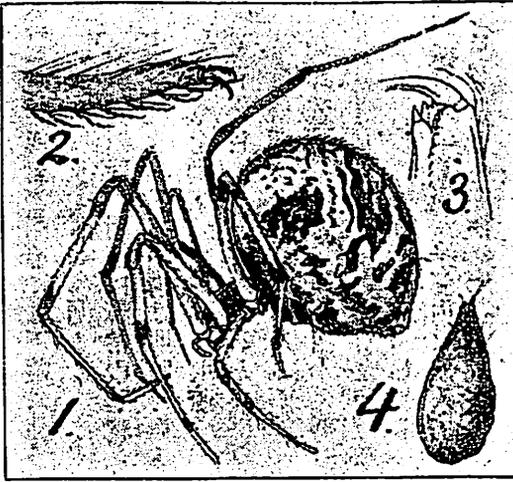
ムムクム ムムクム (Nephila Leach 1815, 3) **ムムクム** ムムクム (Argiope Audouin 1825, 6) ムムクム (Cyclosa Menge, 1866, 11) ムムクム (Larinia E. Simon 1874, 2) ムムクム (Araneus Oerckl. 1757, 47) ムムクム (Gasteracantha Sundevall, 1833, 4) ムムクム (Cyrtauchen Thorell 1818, 1) ムムクム (Poecilopachys E. Simon 1895, 2) ムムクム (Patalectana B. Cragg 1866, 1) ムムクム (Theridiosoma Q. Pickard-Cambridge 1879, 1) ムムクム (Ogulnius O. Pickard-Cambridge 1882, 2)。

キサフラウグモ

其和名は他の大きなクモの網の中に入り込んで居候生活 (Commensalism) をするから小生の命じたものである。初夏の候オニクモの網を見ると大抵何時でも銀色の腹部を有つたギンキサフラウグモが居る。ノヂタナグモの店網を見ると長い灰色のチリキサフラウグモが居る。或るクモの網へ他のクモが入込むと大抵食ひ合ひをはじめるのが常例であるがキサフラウグモの入込んだ時には滅他に斯様なことを見ない。

ヒメグモ

ドイツ語の Wildspinne である。飯室樂園の蟲譜圖説に黄足クモ、フクロクモ、小シマ袋、シポリ袋、ウ



(圖原)

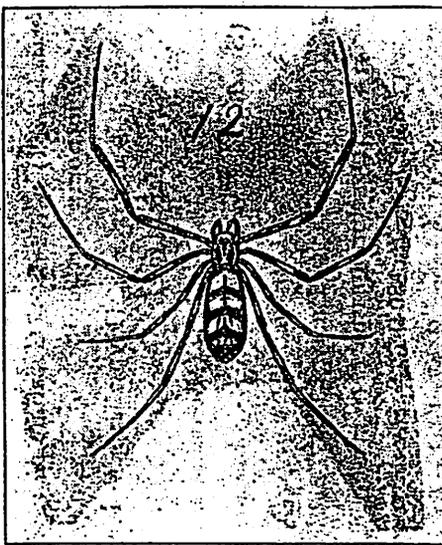
も普通なオホヒメグモの雌で、二は其第四歩脚の跗節である、

スグロ袋、等の名で描いてあるのは恐らく此のヒメグモの一種であらうと思ふ。ヒメグモと言ふ名は私のほしまゝに小さいクモと言ふ意味で命じたものであるが今や汎く同志の間に行はれて居る。捕圖の一は人家に最

検査表に言つてある特殊の毛に注意せられたい。三は左上顎、四は網に三つ四つまでも吊して居る所の卵を入れる囊乃ち卵囊である。同一亞科のアサゲナには有名なる輻觸器が發達して居る、此器は發音装置として信せられるものである。
イマイツミグモ 愛媛縣在住の若き蜘蛛學者今泉虎雄氏の發見せられた新屬であつて、ヒメクモ亞科に近縁な興味あるクモである。サラクモ亞科は一體にヒメクモ亞科と次の諸亞科との間の連鎖形であるが此イマイツミグモは特にさうであるから面白い。

サラグモ

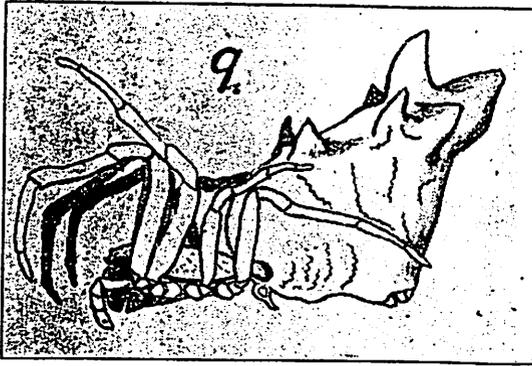
此蜘蛛は皿を倒にした様な網即ちさらあみを張るので皿を有つ蜘蛛と言ふ意味で此和名を得た。種類が多く現今研究中のものも多い。庭園の灌木の枝の間で飼ふことが出来るから山から捕へて來て研究されれば結構である。



(圖原) モグウラヨヂ

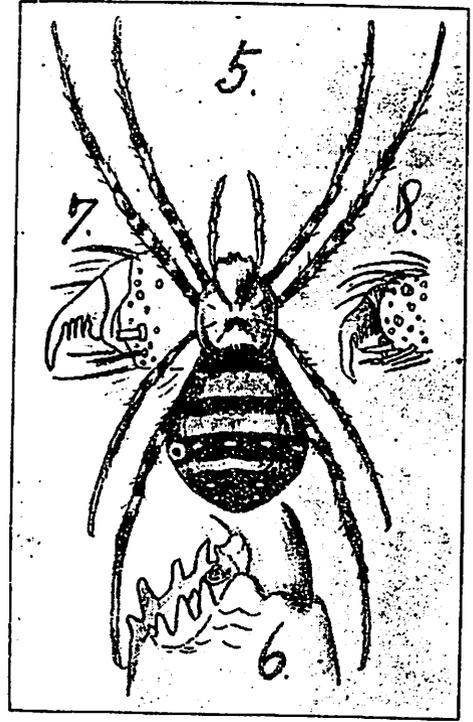
アシナ

ガグモ 一名テナガグモ。冬以外ならば殆ど何時でも採集することの出来る蜘蛛である。古來アシナガグモと言ふ名で

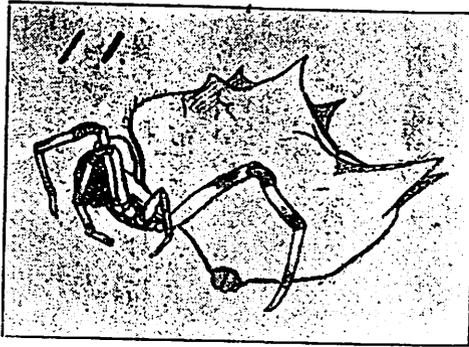


(圖 原)

通用して来たもの故其まゝ
今も用ひて居る。イサフラ
ウグモの様にタナグモ又は
オニグモの網に居候をする
個體もあるが、大抵は大き
な方向不定のまるあみを作
る。
ドヨウグモ 土用に
出現するから得た名であ
る。土用は年一回ではない
が普通に土用と言へば夏の
を想起すること故これで差
支あるまい。一見頗るオニ



(圖 原)



(圖 原)

コガネグモ 既に汎く
知られて居る種である。秋山
蓮三氏著内外普通動物誌下巻
を見られたい。圖の五は雌、
六は其左上顎、七は右觸鬚の
爪、八は左の第四步脚末端を
示す。
ゴミグモ 昔はチリカ
ケグモと言つた。人家の近く
にも多い種類である。挿圖の
九は雌の側面を示す、但し模



(圖 原)

チヨラウグモ
本誌昨年(十一月)を見
られたい。唯一つ總圖
を加へ異名 *Nephila*
limbata Thorell を補う
て置く。

グモに似て居る。
ギングモ 之も極めて到る處に普通なるきれいな蜘蛛
であつて矢張まるあみを張る、溪の邊に棲んで居るところな
どを見るとまことに静かなと言ふ感じがする。體は背甲の褐
色なのと腹部上面の銀
色な部分とを除ければ
綠色ばかりの様に見
える。

様は詳しく描いてなす。

オニグモ

人家の簷などに大きなまるあみを張る蜘蛛であつて初夏の候最も(夕方に)人目につく種類である。圖の十は其の雌を描いたものである。

トゲグモ

腹部皮膚の非常に硬い種類で特殊の印痕と大きな刺とを有つて居る。今は故人となつた嫂の話に「琉球

眞蟹類に就いて

(其二)

帝室博物館 松浦 歡一郎
天産部主任

〔眞蟹類外部の形態〕 眞蟹類を分類するに當り、必要なる外部の形態を左に略述す可し。

頭胸甲

(又單に胸甲とも云ふ)は、俗に蟹の甲良と稱せらるゝにより、假りに甲殼と稱せんとす。甲殼は前縁を甲額(1圖イ)といひ(或は單に額とす)甲額の突起物を額棘(1圖ロ)とす。其後縁腹節に接するところを甲底(1圖ハ)と稱す。甲肩(1圖ニ)とは、左右の上側縁にして、此處にも往々棘刺を生ず。之れを肩棘(1圖ホ)と云ふ。甲肋(1圖ヘ)とは左右の下側縁にして、方形の甲殼を有するものに有つては、甲肩、甲肋、共に一直線上に位するも、扇形菱形等の、甲殼にては、肩肋の境界點は、必らず多少の角度を生ず。之れを肋角(1圖ト)と云ふ。甲殼の背面は平坦なるもの往々あれど、多くは左右相等しき多少の溝條を具へ、此條文によりて、甲

産のオキナハトゲグモの刺はよく捕る時にさゝつて痛し」と言ふことであつた。共に大きなまるあみを張る。十一圖は雌。
ヤマチグモ 山路に多ければ名とす。他のコガネグモと異つて極めて奇妙に粗末な網を作る。まるあみではあるけれども非常に横絲も縦絲も少い、そして粘球は甚しく大きいから面白いのである。

面に幾多の區劃を生じ、其正中に位する上方の區劃を胃部(2圖イ)と稱し、下方を心部(2圖ロ)と稱す。其側方の區劃の内、下方に有るを轔部(2圖ハ)と云ひ、上方に在るを肝部(2圖ニ)と唱ふ。

腹部

(3圖)は俗に禰と稱し、雌雄其形を異にし、皆七節より成るも雄にあつては、數節癒合して其數を減ずるものあり。

脚は五對にして第一對は即ち鉗脚(1圖チ)にして、其他は步脚(1圖リ)なり。鉗脚の末節は、鉗節(1圖又)と稱し、上下の二嘴に了り上嘴(1圖ル)は自由に起伏す可く、下嘴(1圖オ)は上嘴を受けて動かす。物を捕捉するには上嘴の運動により步脚は後方一二對のもの展々其形狀を變じ或は鈎爪(2圖ホ)となり或は泳脚(1圖ワ)となる。眼は眼柄を有し、特

鹿児島縣下の奄美大島及沖繩諸島に於ける蛇類は左記の如く本土四國九州とは全然其趣を異たして居る。且海蛇類の本邦沿岸にて見るは、僅に二種位に過ぎるれども、大島沖繩沿岸には海蛇類も五、六種は居る。

- 1 メツカンヅン Typhlops braminus Daudin
- 2 カラスノビ又カラスヒーパー Natrix pryeri, Boulenger
- 3 リウキウゾウダノシロウ Elaphe schmaeckeri (Boettiger)
- 4 サキシマオナシヤー Liopeltis heminnac (Boettiger)
- 5 オナシヤー Semicarinata (Hallowell)
- 6 アカマター又マツタツ Dinodon semicarinatum (Cope)
- 7 サキシマアカマター rufozonatum w.lli stejneger
- 8 ムギカシラハビ Calamaria pfefferi Stejneger
- 9 ノブナ Hemibungarus japonicus (Günther)
- 10 オキナワノブナ Hemibungarus boettgeri (Fritze)
- 11 ノブ Trimeresurus flavoviridis (Hallonell)
- 12 サキシマノブ elegans (Gray)
- 13 シン Okinavensis Boulenger
- 14 ヒロヨウシロウ Laticauda laticaudata Linnaeus
- 15 エンブヤシロウ semifasciata (Reinwardt)

日本産蜘蛛類

(其七)

アルケア科 (Archaeidae)

日本産蜘蛛類 (其七)

- 16 カメカシノウシ Emydocephalus tirmae Stejneger
 - 17 シロカシノウシ Distera melanocephata (Gray)
 - 18 シロシロマダノウシ Cyanocincta (Daudin)
 - 19 ニシキハビ Hydrus platurus (Linnaeus)
- 内地産の蛇には、體の前半と後半と、斑紋の異なるものなきも、沖繩及奄美大島等に居る蛇には、往々體の前後に於て斑紋の異なるものあり。オナシヤーの如き幼兒は、前半に横斑、後半に條斑あり、老成の後には此斑紋消失するに至る此種名の如く、體の前半を覆ふ背鱗には隆起ありて、後半には之を見ず。カラスヒーパーも體の前半は黒く縁を取りたる横斑あり。其間は白く、各鱗は黒し、後半は黒白混合して、斑點狀と成り、尾部に至る。且腹部は白色にして、後半の各鱗の兩側に小なる黒點並列す、内地産のヒバカリに見る斑點に相似たり。此種の尾は著しく細長なるを以て、他と容易に識別せらる。東京上野の帝室博物館には、日向産のアカマターの標本を所藏せらる。日向に該種の栖息するや否や、奄美大島にてはマツタツと稱し、毒蛇の如く懼れ居るも。右に記せる十九種中八號までは無毒蛇にして九號より十九號までは毒蛇なり。(續く)

岸田久吉

アルケア科と言ふ名は新生代第三紀に屬するバルチック海

沿岸の琥珀層からはじめて見付けられた三個の化石種を含み後にマダガスカルからの一現存種を加へられた *Archaea* の *Koch* (1854) から作られたものであつて、今日では他に南アメリカ産の一屬一種をも容める、それは *Mecysmachenus* *Simon* (1884) であつて、共に非常に面白い種類である、日本には知られて居らぬ。

本科の特徴とする所は(一)頭部は甚しく高くなり胸部より著しく區別されて居ること、(二)胸部には凹み(中窩)無きこと、(三)間疣のあること、(四)脚疣前對は一節、後對は二節なること、(五)上顎は長くあつて外腭を具へず、前縁に一列のほそ長き刺をもつて居ること、(六)歩脚は刺を缺いて居ることなどである。

センセウグモ科 (Mimetidae)

科のラテン名は北アメリカ、ニュージールランド、印度、アフリカ及地中海地方に亘り、廣く分布して居る *Mimetus* *Hertz* (1832) より作られたものである。

特徴 (一)背甲に深き丸形の小さな中窩あること、(二)前列中眼は他の眼よりも大なること、(三)上顎は外腭を具へず、前縁には四以上八までの齒があるけれども後縁には齒が無いか又は小さな唯一個の齒があるに過ぎぬこと、(四)下唇は長さの方が廣さより大きいこと、(五)胸板も長さの方が大きいこと、(六)第一第二の歩脚の蹠節及脛節に規則正しく一種の刺が生えて居ること等。

所屬 *コガネグモ科*中のヒメグモ亞科によく似た六屬を含む、其の網もヒメグモ及オニグモのに似て居る。

日本産の種類

左記の一屬二種のみが知れて居る。

一、センセフグモ (*Erio boliana* *L. Koch*).

二、キウシウセンセフグモ (*E. japonica* *Rosenberg et Strand*).
 センセフグモ 此和名は明治三十七八年戰役の際戦捷を記念すべく命じたものである。冬は落葉の下などに隠れて居るが常でも濕つた地の石の下に生活して居るのを見ることがある。背甲は短く甚だ中凹である。眼は可なり大きい、中眼域は長さの方が廣さよりも大きくはなく、四角よりも寧ろ前邊が後邊よりも廣い。下唇も長さが廣さよりも大きくないが三角状に前方が細つて居る。

プロヂドムス科 (*Prodidomidae*)
 科のラテン名は地中海沿岸の諸國、アラビア、印度、南アメリカに汎布して居る *Prodidomus* *Hertz* (1847) (*≡* *Milia* *H. Simon* 1870) から導いたものである。僅かに四屬三十種許りを含む。

科の特徴は(一)八個の眼の内前列の四眼は直線上に排列し後列の四眼は後曲線を描いて居ること、(二)上顎が強大であつて居り且外腭を有たず縁に武装せざること、(三)下唇が三角形で平坦なること、(五)胸板は廣き卵形を呈し前端圓形後端短尖で全體平坦であること、(五)脚疣前對は互に遠く離れて居るばかりでなく後對とも遠く隔つて居ること、(六)間疣を缺いて居ること、(七)歩脚末端には齒の無き二箇の爪があること等が主なるものである。

ヘルシリア科 (Hersiliidae)

科のラテン名は東洋地方、マダガスカル、アフリカなどに

産する。Hersilia Andouin (1825—1827) から作られたものである。學者によつては Chalinuridae (1876) と言ふ科名を用ひるが之はヘルシリアの異名たる Chalinura Dulmus (1826) から導かれて居る。此科のものは現在四屬あるけれども種数は三十種に満たぬ。

本科の特徴とする點は(一)背甲が長幅略同一であつて小形なる頭部が隆くなり半圓形の溝で胸部と境し、胸部には縦の中窩の有ること、(二)眼が八個あつて二列に並び共に前曲なること、(三)間疣がよく發達して居ること、(四)蜘蛛後對の基節が前對より多少長く次の節は自身の基節よりも更に長きこと、(五)上顎の小形であつて外縁を缺き後縁に齒の無きこと、(六)下唇の半圓又は三角形であること、(七)下顎の下唇前方に於て相接觸して居ること、(八)歩脚第三對の最短なること及附節端に三爪を有して皆有齒なること等である。

ヒラタグモ科 (Urocteidae)

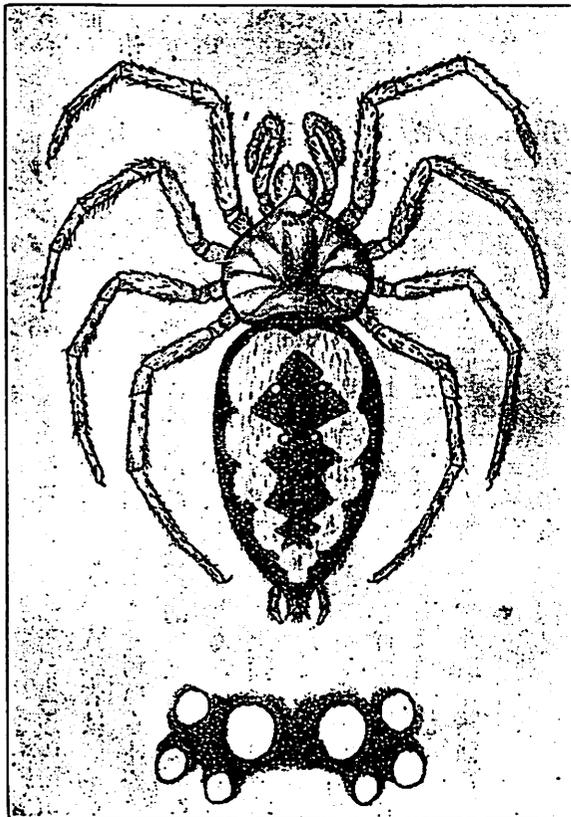
唯一屬 (Uroctea Leon Dufour, 1820) の科である。自分の知る範圍では種數も僅かに六つである。分布は朝鮮及舊來の日本、支那、印度、地中海沿岸の諸國などであつてアウストラリア及西アメリカには生活して居らぬ。

特徴 (一)背甲は横に腎形であつて長さは廣さに劣り、頭部は小さく格別頭溝と言ふ様なもので胸部と境して居らず、胸部は縦の中窩と言ふものは無いけれども大きな凹みを作つて居ること、(二)眼は八個二列に

並んで居る、前列中眼は格別他の眼より大きいこと、(三)腹部は多少壓へつけた様に扁きこと、(四)下唇は半圓形なること、(五)下顎は下唇を圍み其前方で接觸しあつて居ること、(六)上顎は大形でなく齒を有たぬこと、(七)歩脚は略同長であつて刺を有し、末端に三爪を有すること、(八)無いか有るかかわり兼ねる様な小さい間疣があること、(九)蜘蛛後對は三節で非常に長いに拘らず、前對は短く且柱状を呈して居ること、(十)肛門隆起の特に大形に發達し側に長毛の總あること

日本の種類 左記の二種である。

一、テフセンヒラタグモ (Uroctea ikedai K. Kishida)



(眼の其とモグタラヒ)

ニ、ヒラタグモ (*U. compactilis* L. Koch)

ヒラタグモ

一名ヒラタグモ古來 ヒラタグモの様にあやまる」と言ふ諺があるけれども其ヒラタグモと言ふものは能くわかかつて居ない、併し自分の見る所では鏡の如き白き幕を作つて牆壁の間に貼して居るものとするとは動かない様であり又極めて能く俗人の眼に入る普通のものであることも確かである、そこで私は前記の學名を有する種に此和名を有させたのである。世間ヒラタグモと稱するものは人によつて甚しく異つて居るので今の時に當つて圖を挿んで置くことは甚だ必要の事らしいから舊日本産の普通種の寫生畫を入れて置く。

アムモクセヌス科 (*Ammoxenidae*)

南アフリカのケープ植民地及トランスバル産の *Ammoxenus* *J. Simon* (1893) と言ふ五ミリ半位の一屬一種の科であつて一見ヘルシリア及ヒラタグモに似て居る。

特徴

(一)背甲は長さが廣さより甚だ大きく、前方にはぞくなつて居り、中窩の深きこと、(二)眼が一所にかたまつて居り、前列は後曲にして大形の眼から出來て居り、後列の眼は小形で僅かに後曲な線上に排列して居ること、(三)上顎はザトウムシ類の様になつて居り、前面上部に突起を生じて居ること、(四)下唇は三角形、(五)下顎も三角形で短く下唇の前方で觸れ合つて居ること、(六)氣管の氣門は蜘蛛の上ほど前方に位置し横に廣き襞を伴ふこと、(七)間疣を缺くこと、(八)蜘蛛前對の廣く離れて居ること、(九)歩脚は後方の者程長く多くの刺を有し長き附節には偽節があり、末端には四個の齒ある二爪を有すること杯。

ワシグモ科 (*Drassidae*)

ワシグモ屬 (*Drassus* *Walckenaer*, 1805 = *Drassodes* *Westring*, 1851)

から導かれた科名である、或學者はノキリグモ科 (*Gnaphosidae*) と名づけて居るがあまり用ひられぬ。

特徴

(一)背甲は卵形中凸で放射溝は無いが明かに中窩は有つて居る、(二)眼は四個六個の種類もあるが多くは八個を備へて居り、二列に並んで居る、(三)上顎は外髁を具へて居る、其縁には齒とか鋸片 (*Carinae* *Keel*) と言ふ奇妙な葉狀突起とかを備へて居る、(四)下唇は長さが廣さよりも大きくある、(五)下顎は外縁には鋸 (*Serrula*) と言ふ櫛狀部を有し内縁には毛總を有つて居る、(六)蜘蛛前對は唯一節であつて柱狀なること、(七)間疣の無きこと、(八)歩脚の附節には毛總があつて時には蹠節までもひろがつて居り、末端には二個の爪があつて多くの齒を具へて居る。

所屬

四十餘の屬を含む、之をヘミクテラ亞科 (*Hemicloetineae*)、ワシグモ亞科 (*Drassinae*)、キテロン亞科 (*Cithaeroneae*)、キネラデス亞科 (*Cybaecidinae*) に分節せしめる。

日本産の種類

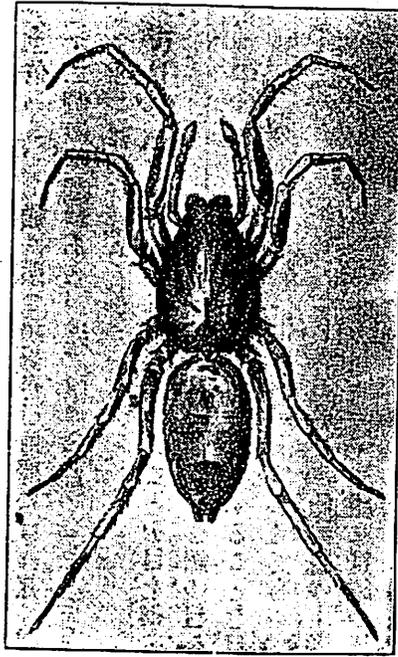
左記の拾屬あつて、種数は括弧内の數字の示す如く合計二十三であるがまだ増加の見込である凡べてワシグモ亞科のもので日本特有のものが多し。

- 一、ムシナグモ (*Neodrassus* *Kishida* 1912. 1)
- 二、アカネグモ (*Oenomum* *K. Kishida* 1912. 1)
- 三、ソミグモ (*Drassus* *Walckenaer* 1805. 7)
- 四、イタチグモ (*Tanites* *J. Simon* 1873. 1)
- 五、ヒタキグモ (*Leptodrassus* *J. Simon* 1873. 1)
- 六、クロナツグモ (*Nigritaraneus* *K. Kishida* 1912. 1)
- 七、

ケブリグモ (Prothesima L. Koch 1872 = Melanophora C. Koch 1833 non Meigen 1803, 4) / ハノシメグモ (Joshidaia K. Kishida 1912, 1) / テオノグモ (Callilepis Westring 1874, 2) / メキリグモ (Gnaphosa Tsuboi 1804, 3)。

ムジナクモ

貉の意、ムジナと言ふ獸は好く睡る肉食類であつて竹を叩いて醒ましてもおちきに睡込むと昔の本草書にある、今の動物學上では能くわからぬやうであるが單に肉食性と言ふ點をとつてクモの名に冠せた。此ムジナグモは朝鮮南部の特産で全長七ミリ許、背甲は褐色、腹部は眞の淡黒色の可憐な蜘蛛である。上顎の前縁に四齒後縁に六齒ある點は慥かに世界一品であらう。池田秀藏氏の發見にかゝるアカネグモ 家屋内のあまり清潔でない所に生活する



(圖原)モクネカア

和名は全身褐色を帯び所謂紅霞に髣髴たるより得たるものである(ラテン名も同然)。丹後にて小生の發見したもので全長

十三ミリ半、上顎前縁に五齒、後縁に三齒あると言ふ珍品である。寫生圖を挿んで參考に資する。

ワシグモ

ドイツにて本屬のものとして Grelspinne と言ふに因んで驚蜘蛛と定めた。上顎は前縁にも後縁にも二又は三個の齒を有つて居り、前列眼は同距離に排列し後列は多少後曲である、兩列は側眼に於て廣く離れて居るからイタダグモヒタキグモと容易に區別し得る。

ヒタキグモ

熾乃ち山家に多き圍爐裏に炭火の殘りたるを思ひ出し此蜘蛛の色彩をあらはさうとしてかり用ひて作つた名である。越後長岡市に於て中村正雄氏の發見したワシグモ近似の一種である、全長は九ミリ、背甲は紅褐色であるが淡白色の毛で埋められて居る、前列中眼が大きいから目立ち易い。

クロナツメグモ

四國(伊豫)で今泉虎雄氏の發見した新屬であつて全長十ミリ、全身黒くナツメ(果實)の如き腹部を有つて居るから此和名を與へた。蜘蛛後方の二對が揃ひも揃つて長い點が著しい、尙上顎の縁には何等の武装も無い

ケブリグモ

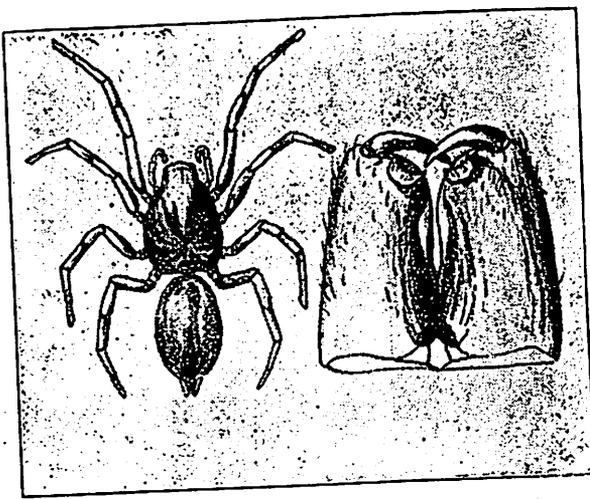
ドイツで Schwarztäger と言ふ、和名は其色彩のけぶつた様な點に因んで與へたものである。イマイツミケブリグモが四國産なるを除外例として、他の三種は九州の産であつて本州からは一種も採れぬ。

ヨシダグモ

米澤で吉田貞次氏の發見した全長六ミリ半の愛らしい蜘蛛であるから、氏の蜘蛛學上の效績を記念すべく斯様な和名屬名を命じたのである、基本標品は氏の懇望によつて氏の手許に保存されることになつた。背甲は褐黒

色で光澤強く腹部は黒色であつて三個の白斑が調和よく描き出されて居る。眼は各列共二直徑宛はなれて居る、前列は端直後列は前列より長くして亞直(稍後曲)、中眼域の長さは廣さの殆ど二倍ある、上顎は濃き黒褐色で前縁には齒無く後縁には小さな二個の隆起がある。南アメリカ産の *Iatungena* E. Simon (1898) に最近縁らし。S。

メキリグモ 磨の目を深くすることを目を切ると言



(よせ意注に葉鋸) 頭上の其とモグリキメンセーヨチ

ふし鋸の目を鋭くすることを目を立てると言ふ、恰も此蜘蛛の上顎の後縁には鋸の様な鋸片があるから、磨や鋸の目を切る目切男の様であると云ふので此名を附けた。鋸片の圖は外國の書物にもあまり出て居ないから出して置かう。模式的なメキリグモ (*Gnaphosa* co-

mpirensis Jönsen et Strand) は朝鮮にも九州にも居る。朝鮮には尙一種テウセンメキリグモ (*G. chosonianak*, *Kashida*) が居る。本州の東北にはウセンメキリグモ (*G. uzumiana* K.

Kashida) と云ふのが生活して居る。テオノグモ 屬はメキリグモと似たものであるが次の如くに區別し居る。後列は強く前曲であつて前列よりは明かに長し………メキリグモ屬 (*Gnaphosa*) 後列は端直又は極めて僅かに前曲であつて前列よりほんの少し丈け長しに過ぎぬ………テオノグモ屬 (*Calliepis*)

編輯局より

丸善株式會社發行 ● 東北帝國大學藏版科學名著集第四冊 || カール、フリードリッヒ、カウス原著理學博士愛知敬一、大久保準三兩氏共譯ポテンチアル論と理學士山田幸五郎氏譯地磁氣論 || 一冊。東京日本橋區通三丁目成美堂發行 ● 農學士見波定治氏著遺傳進化學 || 一冊。神田錦町中興館發行 ● 牧野富太郎氏著植物分類學第一篇 || 一冊。東京々橋區柳町積文社發行 ● 鈴木京平氏著最新製革法 || 一冊の寄贈ありし一特本誌主幹病氣入院等の爲め次號に紹介致すことと相成り、寄贈者及び讀者に對して申譯御座なき次第御詫び申上候………本誌々友中山醫士より左の通り申出有之候間御承知相願候記者は本誌愛讀者に代りて同醫士の厚意を感謝致候。

東京牛込區草稻田南町八番地

内科 醫士 中正之祐

外科 本誌講讀諸君は診察無料 體格檢査料並に藥價輕減

なるも、此の凸線こそ深重の意味あるものと信ずるなり。即ち其の細かなる凸線を備ふる殻頂部は圓くして最も厚く、左



圖二第

右の凸線茲に集中するが故に、動物若し此の部分に旋轉するを得なば、有力の穿孔器たるべきを信ずるなり。

青木熊吉氏の談に依れば、三崎油壺はふなくひしの蕃殖

日本産蜘蛛類

(其八)

岸田久吉

居る。

パルピマヌス科 (Palpimanidae)
南アジア、アフリカ及地中海地方に亘り廣く分布して居る所の *Palpimanus* L. Dufour (1820) から導いた科名であつて現今拾壹屬から成立つて居る。外見ハヘトリゲモに似た點があるけれども諸種の點に於て其科には縁が近いらしくない、寧ろワシグモ科やエレスズ科に近いものである様に考へられて

地として古來有名なるが故に、如何なる暴風に際會しても、船夫は是に寄りて難を避け、碇泊するを肯んせすと。又同氏は嘗て一漁船に宿泊せしに、夜陰風風ぎて波靜まりたる頃、船底よりコリ／＼と物を噛るが如き音聞てへければ、必定鼠の所爲ならんとて、仲間の者と共に船の隅々まで隈なく搜索せしも見當らず、頓がて枕に著けば復ひ元の如くコリ／＼とくと音を發せん、後に想へば全く此の動物の所業たるを察せりと。此の話は貝殻を以て穿孔器ならんと察する予の理想と暗合するが如くにて、頗る興味あるものと感せり。貝殻を以て穿孔器とせる古説に對して有力の反對は、殻面に磨滅せる痕跡なしといふにあれども、斯かる下等動物の再生力は甚だ強くして、貝殻が磨滅するに従ひ直ちに補足せらるべきを想へば、反對の效力は自ら消滅すべしと思考せらる。(完)

主要なる特徴は(一)眼が入つあつて二列に並んで居ること(二)上顎には外髭があり、前縁は無齒であるけれども後縁には時に小さい壹箇の齒を有つて居ること、(三)下唇の長さは廣さよりも大なること、(四)下顎は下唇の前方で相觸接して居ること(五)胸板は卵形で長さは廣さよりも大なること、(六)

第一第二對の歩脚は他の歩脚よりも太く、脛節蹠節及跗節には毛總のあること、(七)歩脚末端の爪は二又三あること、(八)間疣を具て居らぬこと、(九)ニューシイランドの *Huterea Cambridge* (1879) (六疣あり) の外は脚疣が二箇だけであることなり。

ヒゼンヅモ科 (Zodariidae)

科のラテン名はヒリピン群島、アジアの中部と南部アラビア、アフリカ、地中海地方に分布して居る網を張らぬ所の *Zodariion Walckenaer* (1847) と言ふ陽地性の蜘蛛から來たものである。古くは *Enyoidae* と言ふ科名が廣く用ひられて居たが之は *Enyo Audouin* (1825—27) と言ふ名から導いたものであるが今日は此屬名はツダリオンの異名として取扱はれて居る。

特徴 (一)背甲には縦走する中窩のあつて放射溝を缺いて居り、前方のはそくなつて居ること、(二)眼は後曲の二線上に並ぶが三列にならぬ居ること、(三)上顎に外棘があり、其前縁はストレノ屬 (*Storina Walckenaer* 1805) に於て壹齒あるを例外として無齒であり、後縁は常に齒の無いこと、(四)下唇は三角状で長さは廣さに及ばぬこと、(五)下顎に凹みなく鋸を缺き唯僅かに先端に毛總あること、(六)胸板は平坦であること、(七)歩脚の末端に二爪又は三爪あつて毛總は無いが似寄つた毛群が爪の傍にあること、(八)脚疣は六箇あること等。

所屬 二十一屬、之を四つの亞科に分屬せしめる。(一)ホマロニクス亞科 (*Homalonychinae*) (二)ストレノセルハ亞科

(*Stenomorphinae*) (三)キマノア亞科 (*Cydraina*) (四)ツリフトテレ亞科 (*Cryptohelmae*) (五)カゼンツチ亞科 (*Zodariinae*) 乃ちそれである。

日本産の種類 ヒゼンヅモ (*Hermiphus japonicus Bösenberg et Strand*) と言ふ壹屬壹種がある許りである。和名は最初の産地肥前を記念すべく命じたものである。雌雄共に三ミリ半位の殆ど全身黒色なる蜘蛛で腹部上面には三對の白斑がある。

カニヅモ科 (Thomisidae)

カニヅモと言ふ和名は本科中の一屬 *Xysticus* C. Koch (1835) の外形なり運動なりが蟹を聯想せしめる故に名付けられたのがもとである、此屬のものはドイツ語でも *Krabbe-spinne* と言はれて居る。今日では殆ど科全體のものを此名で呼ぶ、イギリス語の *Crab spider* の如きは此意味のものである。つてシステクス一屬の稱ではなし。

科の異名として人口に膾炙するのは *Thomisidae*, *Misumenidae*, *Misumenoidae*, *Philodromidae* 位なるもののみなり。

特徴 (一)背甲は廣さが大であつて少なくとも長さよりも小なる事無く、殆ど常に中窩を缺くこと、(二)眼は前曲なる二列に並ぶること、(三)上顎は外顎を具へて居るが前後の兩縁には(偶には小さい齒が少數あるけれども)大抵齒を有たず平滑であること、(四)胸板は平坦で印刻なく後方にほそき心形又は鈍き三角形であること(五)下唇は長さが大なること、(六)間疣あること、(七)脚疣前對は他より大きく且つ互に近接して居ること、(八)歩脚第一第二對は他の對よりも長く其

の方向も普通のクモと異なつて居り、末端は皆爪を備へ稀に前脚だけは毛總めること杯。

所屬 壹百貳拾餘屬あつて、六つの亞科乃至(一)アムントキルム亞科 (Aphantochilinae) (二)ステイトロニス亞科 (Stitropodinae) (三)ストロウニス亞科 (Strophinae) (四)カニクモ亞科 (Misumeninae) (五)タルグモ亞科 (Stephanopisinae) (六)ヒュンキ亞科 (Philodrominae) に分屬して居る。

日本産の種類は十八屬五十種が記載済みとなつて居り他に未發表の種が若干ある。今屬名と種数を左に擧げる。

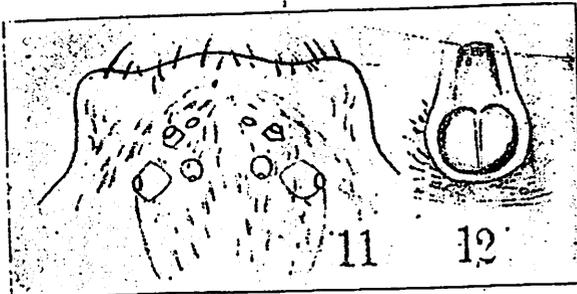
- カニクモ亞科十五屬三十九種 *Dicta* E. SIMON (1880) 1, *Oxyrate* L. KOCH (1877) 2, *Fumans* E. SIMON (1875) 1, *Manacs* THORELL (1870) 1, *Cartiachus* THORELL (1870) 2, *Thomisus* WAICKENAER (1805) 4, *Rimacnia* E. SIMON (1875) 1, *Pisnius* E. SIMON (1875) 2, *Eremia* K. KISHIDA (1912) 1, *Misumenia* LAJREILLE (1804) 5, *Hertzus* E. SIMON (1875) 2, *Diaea* THORELL (1870) 2, *Oxyptila* E. SIMON (1864) 2, *Xysticus* C. KOCH (1835) 11, *Synaema* E. SIMON (1864) 1, タルグモ亞科壹屬壹種 *Cupa* E. STRAND (1906) 1, ヒュンキ亞科二屬十種 *Philodromus* WAICKENAER (1825) 10, *Tibellus* E. SIMON (1875) 1,

ヒュンキ

學名は *Oxyrate striatipes* L. KOCH である。

日本産蜘蛛類 (其八)

未だ基本標品を検するの機会を得ぬけれども *Oxyrate sticta* F. KARSCH. は一異名であることは確かである、カルシウ氏の掲げた圖を見ると中眼域は前が後よりも狭いが之は氏の誤であつて若し氏の圖が正しければ屬はアフリカ産の *Ostates* E. SIMON (1895) に訂正するべきである。和名は體色の若葉に似て居るに因ひ但し五月頃若葉の茂つた樹上に成熟するから此和名は一層妙である。



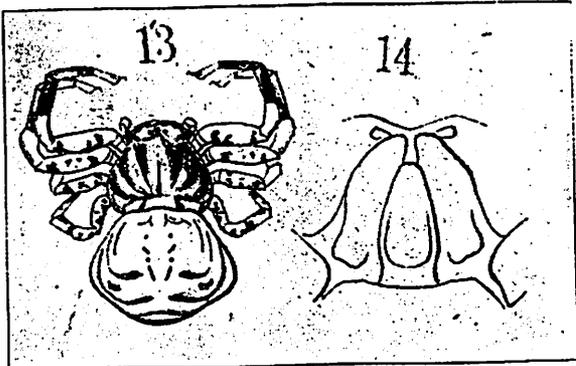
域眼の雌は(11)モクンゼウの外以眼中列前。眼の雄は眼の塔いさ小は眼え生の毛狀羽、ところを在に上の塔いさ小は眼らあでところれを意注はに人業がとる居て(12)るあでのな切大が列非の眼はに類分がう門殖生の其は

K. KISHIDA と名を、吉田貞次君が明治四十四年十月五日に米澤附近の叢地に於てはじめて採集せられた珍種である。全長は六ミリ半、全身灰褐色を呈して居る。同屬の他種はアフリカ地中海地方からして東洋地方に亘つて見出される。ヒュンキチ 一名アツチカニクモ 數種あつて總て *Thomisus* WAICKENAER (1805) に屬する。和名は大抵其の腹部上面の形が五角形であつて能く繪で見ると射線に似て居るため

ウゼンクモ、又はウゼンカニグモ、羽前産のカニグモの意味で小生の命名にかかると。學名は *Monases simoni*

小生の命じたものである。

タンゴグモ 一名タンゴカニグモ 丹後産カニグモの意味である。學名は *Eremnia typica* K. KISHIDA と言ふ。エトミタはラテン語の隠者と云ふ詞であるが之を蜘蛛學へ借りて來て屬名とした。今では日本の特産である。明治四十三年九月小生が郷里に於て發見したのが記載につかつた標品である



器口の其は(14)形全の雌は(13)モグゴント

が其後明治四十五年(大正元年)六月友人西川愛藏君また小生の郷里で櫻の樹皮の穴に潜んで居るのを捕へて恵まれた、全長五ミリ、半許の愛らしい蜘蛛である。ハナグモ 一名ハナカニグモ 學名は *Misumenia trichspidata* (FABRICIUS) と言ひ多くの異名がある。キンバウゲ、アサミ、野菊等の花に居て之を訪ふ所の蜂や蠅を捕へて食ふ蜘蛛であつて單に分布が廣く全世界的なるのみでなく殆ど何時でも採集することが出来る。雌雄によつて腹部上面及歩脚の色彩並びに體の大きさが甚しく異なる。

カニグモ 一名ヤミイロカニグモ 學名は *Xysticus epiphaneus* E. SIMON と言ふ。九州及本土に最も普通な土上のカ

ニグモであるからヤミイロと言ふ形容部を取除けても差支無



觸の雄のモグニカロイミヤ右の其は(15)の右の右類分は(16)の類分は是が圖なるものである

い。此の蜘蛛のことは昨年八月のサイエンス(第八號)に書いて置いたからそれを見られた。

タルグモ 一名タルカニグモ 學名は *Cuba typica* W. BOEHNBERG et E. STRAND と言ふ。九州(佐賀)の特産。和名は學名の意譯である。全長は五ミリ、第一歩脚は十一ミリ、第二歩脚よりも長い。上顎の縁には明な歯があり下顎は端直であつて、其間に長さの廣さよりも小さい所の下唇を以て居る。アフリカの中部以北セイロン島マレイ群島に分布し八九種を有する *Regulus* BICKARD-CAMERIDGE (1832) オランダ産の *Latia* L. KOCH (1878) の二屬とは近縁であつて殊にイサラとは極めて近い種類らしいが眼の後列が前曲でなくて端直な事は明かな識別點であると思ふ。

(註者曰く、誌面の都合にて、本科の一種エビグモの記載は九月號に譲れり。乞ふ所せよ。)



日本産蜘蛛類

(其九)

岸 田 久 吉

エビグモ

蟹グモの兄弟分ではあるが前脚の附節に毛總があつたりして區別されるところから蟹に縁の近い蟹を頭に頂くことになつたのである。學名は *Ptilofonus roseus* K. *insidia* と言ふ。從來未成熟の雌雄が知れて居ただけであつたが大正三年五月になつてはじめて成熟した雄が得られた。全長は五ミリ半、第一步脚が六ミリ半、第二步脚が十六ミリを算すると言ふ面白い種で之だけ見ては北アメリカに産する *Ido Keyserling* (1884) の様であるが前列の眼が略同距離に在つて同大なこと、下唇の長さは廣さよりも大なること、杯によつてヒロドロムスなる事は明かである。同屬のもので我が日本に産するものは他に九種(少くとも)ある、尙研究が進めば一層種數の増加することは疑無い。ドイツ語にて此屬のものを *Flechtrecker* と稱する。日本にも産するキンイロエビグモは *Goldarbener Flechtrecker* である。

ヒトヘグモ科 (Platoridae)

東洋地方日本及南アメリカに分布する體の甚しく扁平な蜘蛛から出來て居る一小科である。科のラテン名は支那産の蜘蛛 *Plator* E. Simon (1880) から導かれたもので今では此屬の標品は印度からも捕れて二種になつて居る。

特徴

(一) 背甲は長さが廣さに及ばず腎形であつて中窩を缺いて居り、頭部が非常に小さいこと、(二) 眼は頭部全體を占めて明かに二列に並び、後列は遙かに前列よりも長ること、(三) 腹部も扁平で間疣を缺くこと、(四) 蜘蛛前對と中對とは殆ど同列にあつてカポニア科に似て居ること、(五) 上顎前縁には二三齒、後縁には二齒あること、(六) 下唇は平坦であつて胸板と癒合せぬこと、(七) 下顎前縁に毛總はあるけれども鋸は無いこと、(八) 胸板が平坦で印刻を有せず、腎形で後方に廣いこと、(九) 歩脚は無刺で其の末端に毛總も毛束も無く二つの爪があること杯。

所屬

自分は一時プラトルの一屬にまとめて可いと思つたことがあつたが今日では四屬六種を認めることに考がかはつた、屬の檢索表を次に掲げる。

- 一、 蜘蛛は殆ど同大 *Plator*.
 - 二、 蜘蛛前對は他對より明かに大形 一、 *Hilcegunna*.
 - 二、 前列中眼間は中側眼間よりも大 *Hilcegunna*.
 - 三、 前列は後曲 二、 *Veetus*.
 - 三、 前列は端直 *Dolomadius*.
- 日本産の種類ヒトヘグモ (*Hilcegunna nipponica*)

下 (Kishida) の一属一種のみ。ヒトへは單衣の意味であつて、半紙よりも薄し其の動物體をあらはす格好の名であらうと思ふ。明治四十四年の夏京都の人家で夜間熟睡して居る小生の顔を這ひまわつて目醒ましたために採集せられた十箇許の標品を基本とする。雌も捕れて居るが成熟して居るのは雄だけである。其の全長四ミリ半、第一歩脚は最短くて十一ミリ以内、第二歩脚が最長で十五ミリ半を算する。全身淡褐色で唯腹部上面は後方程濃く黒色を帯びて居る。

アシタカグモ科 (Heteropodidae)

此科はフクログモ科の一亜科として取扱はれる事もあり、或はカニグモ科の一亜科であると考えられる事もある、併しまた一つの科として獨立させる學者も可なり多い。異名に *Sparassidae* と言ふのがある。之は *Sparassus Walckenaer (1805)* から作つた名であるが、長い間誤つて用ひられて此屬名が役に立たせられたため、可なり普通に知られて居るが *Sparassus* はユフダチグモ属の一異名に過ぎぬことが (シモン氏によつて千九百三年) 明かにせられた今日に於ては廢棄するが至當である。 *Sparassus* として一般學者間に信せられて居たのはユフダチグモでは無い、右の次第で廣く知られて居た *Sparassus* が消滅して其群の名を作る必要が生じたのでシモン氏は慣用に近い様にとでも思つてか *Eusparassus (1908)* と言ふ名を與へて居る。

特徴 (一) 背甲は中凸で多くは縦の中窩を有つて居ること、(二) 眼は八個、四眼宛二列に並んで居ること、(三) 蜘蛛

前對は互に接近して居り、後對は二節から出來て居て長くと、(四) 上顎は外髀をもつて居り、前縁に二三齒、後縁には二箇以上多數の齒を生じて居ること、(五) 下顎は中凸で毛總を備へて居り、間に下唇を嵌むけれども決して内方に傾かぬこと、(六) 歩脚の方向は餘程カニグモ科に似て居り、前脚の趾節と全體の附節に毛總あり、末端には多齒ある二爪と二つ以上の毛束とがあること杯。

所屬

四十三屬あつて二亞科に分領せられる。蜘蛛が特別な柄の先端に在る種類はカブラヤグモ亞科 (*Stasinae*) 下屬し尋常なる蜘蛛の種類はアシタカグモ亞科 (*Heteropodinae*) に屬する。

日本産の種類

六屬十四種、*Sugella E. Strand (1906)* の一属一種は所屬不明であるが、他は左の通りである。

- カブラヤグモ亞科二屬三種、*Thelcoopsis F. Karsch (1884)*
- Stasina E. Simon (1877)*、アシタカグモ亞科三屬十種 *Micrommata Latreille (1804)*、*Heteropoda Latreille (1804)*、*Isopoda L. Koch (1875)*、

カブラヤグモ

學名は *Stasina japonica Bösenberg et. St. End* 九州の産、全長六ミリ半、背甲と歩脚とは褐黄色、腹部上面の地は黄褐色で其上に稍濃き暗褐色の斑がある、和名は蜘蛛の柄の先に在る様子が鎗矢の鏃に髣髴たるものがあるに因つて自分の命じたものである。

ユフダチグモ

學名は *Micrommata virescens (Clerck)* と言ふ *Sparassus smaragdulus Walckenaer* は能く知られて居る異名である。ヨウロッパ大陸及日本の東北地方に産する。ドイ

ツ語では Huscaspinne 又は Graspinne Huscaspinne と言つて居る、前者を意譯したのが和名である。

體長十一ミリメ乃至十三ミリメ、雌は全身綠色、步脚は淡綠黄色で末端程濃い。雄は一體に淡綠色、背甲は銚色を帯び腹部の地は褐黄色で中央と兩側に赤色の美しい縱帯がある。但し此の赤色の斑は幼時にはあらはれず、成熟するに際して現れるものである。共に一見サグモ科及カニクモ科を想起せしめる。

アシタカグモ

此の和名は昔からある、併し其の指示するものが何であるか充分明瞭でない、自分は色々の理由からして *Heteropoda Venatorius* (Linnaeus) 即ち *Heteropoda regius* (Fabricius) だけに用ひることに限定した。アメリカの書物に見る Giant crab spider も本属のものである。分布甚廣く亦世界的なものとて名高い。小笠原には同属のオガサハラアシダカグモ (*H. kodai* K. Kishida) がある。

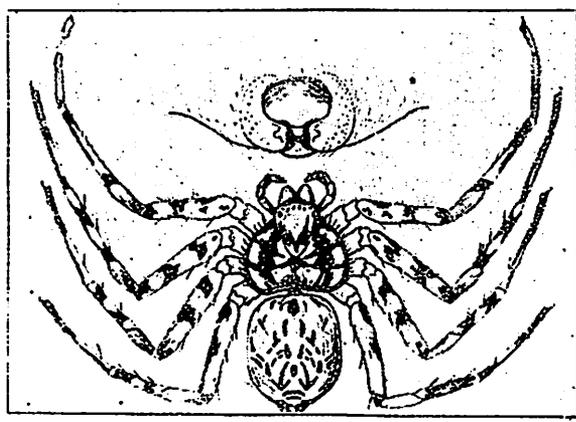
アハセグモ科 (Selenopidae)

アハセグモ属一つから成立つて居る。アハセグモと言ふ和名は體が扁平であるけれどもヒトヘグモよりは厚く、ヒラタグモ(之をワタイレに擬して)よりは薄いから、其間をとつて拾位なところと言ふので小生の命じたものである。あまり分類のよくわかつて居ない人がホントのヒラタグモは之ではありませんか杯と言ふ種である。

特徴

(一)背甲は廣さの方が大であつて深き中窩と放射

線とがあり前足の截形なること、(二)眼は八個、頭部の全幅を占めて居り貳列ではあるが後列中眼が前進し過ぎて居る故に前列が六眼から成立つて居る様に見えること、(三)明かに間先無きこと、(四)蜘蛛は柄の先に在らず、後對(貳節)の外壹節で前對は互に稍廣く離れて在ること、(五)上顎は外腭を



アハセグモの雌(東京産) 上の圖は其の生殖門を示す

有ち、前縁には澤山の毛と二三の齒あり後縁には二齒あること、(六)下顎は外開きで、毛總があり、中凸なること、(七)下唇は長幅殆同じ位平坦であつて前端截形なること、(八)胸板は平坦で、卵狀圖形であること、(九)步脚前對の蹠附兩節には毛總が密生して居り、末端には細い多くの齒ある貳爪と

密な毛總があること杯。

日本産の種類 アハセグモ

(*Selenops bursarius*)

可 (Karsch) の一種のみ。全長十ミリメ位、全身淡褐色で腹部は淡黒色を帯びて居る、人家の壁間などに多い。挿圖の模様は判然して居るが標品によつては消失して居るもある。

フクログモ科 (Clunionidae)

特徴

(一) 背甲は卵形で放射線及縦の中窩があること、
 (二) 眼は八個で普通貳列にならんで居る、但し曲り過ぎて三
 列の觀を呈することがあるけれどもドクグモ等とは異つて第
 二列が四眼であること、(三) 間疣を缺くこと、(四) 蜘蛛前對
 は近接して居ること、(五) 上顎は外髁を具へ縁に強き齒ある
 こと、(六) 下唇は遊離し平坦又は僅かに中凸なること、(七)
 下顎は内縁に毛總を有し、下唇をかこまぬこと、(八) 胸板は
 卵状又は心形であつて後方に短く尖つて居ること、(九) 歩脚
 の方向は尋常であつて第一第二の歩脚の蹠節附節には毛總を
 具へ、末端には貳爪と毛總があること杯。

所屬

壹百參拾參屬あつて五つの亞科に括られる。(一)
 フクログモ亞科 (Clunioninae) (二) ドクグモモドキ亞科 (Cte-
 ninae) (三) ヲシシマグモ亞科 (Iocraninae) (四) ツヤグモ亞
 科 (Micarinae) (五) ネコグモ亞科 (Corinninae) 即ち夫れであ
 る。

日本産の種類

九屬三十一種尙目下未記載のものが若
 干ある。

- フクログモ亞科三屬二十三種 *Cluniona* Latreille (1804) 15,
Characanthum C. Koch (1839) 7, *Anypthana* Sundevall (1833)
 1, *トクグモモドキ亞科* 一屬二種 *Analtia* F. Karsch (1879) 2, *トクグモ*
モドキ亞科 三屬三種 *Agraea* Westring (1861) 1, *Piruroda*
flus C. Koch (1839) (= *Meariosoma* E. Simon 1876) 1, *Oribolva*
 E. Simon (1897) 1, *ツヤグモ亞科* 一屬二種 *Micaria* Westring

(1851) 2. ネコグモ亞科 一屬一種 *Trachelas* O. Pickard-Cambri-
 dge (1872) 1,

フクログモ

越冬のために薄繭状の袋を作る所からド
 イツ語で Sackspinnne と言ふのを意譯して、クルビオナ屬の和
 名としたのである。最も普通人の眼につくのはハマキフクロ
 グモ即ち *Cluniona japonicola* Bösenberg et Strand. と言ふ學名
 を有する淡黄灰色の蜘蛛であつて、梅雨前後路傍の葉を折曲
 げて其の中に棲んで居る。

イバラグモ

キラカンテイウムは thorny hand の意味
 故棘の澤山ある植物に能く見る何々イバラ (荆棘) と言ふを
 假つて來てラテン名を意譯したもので、藪藪に居るとか藪藪
 の様であるとか言ふわけは少しも合んで居らぬ。雌は一見し
 てフクログモと近い種類と思得るが雄は觸鬚に特色があるか
 ら容易に彼のから區別される。

ドクグモモドキ

學名は *Analtia fauna* F. Karsch と
 言ひ、眼の排列の工合や外形が一見ドクグモ類では無いかと
 思はせる。本屬はカルシユ氏が日本から記載したものである
 が其後マレーシア、アフリカ、北アメリカにも産することが
 知れ、予の調査する所によると日本にもまだ數種未記載のも
 のがある。(本科の記載は次號に續く)



本種は普通の鶴雉に比し一層赤味を帯びた羽毛を有し極めて美麗なり。且つ其尾も普通種のものに比して一層長く從て横斑の數も彼の普通十節位時に十二三節に及ぶものは稀であるが此種は普通十二三節を有して居る。

分布區域狭く九州及伊豆に於て採集せられた。

コンジロヤマドリ (Phasianus jima, Dresser)

日向、大隅に於て採集せられたもので最近に發見せられたるものである。

本種の特徴としては、光澤ある絹絲様の白斑を腰部に有して居るから直ちに他の種と區別することが出来る。

ミカドキジ (Calophasis mikado Gr.)

種名ミカドは日本語天皇の意で、英俗名ミカド、フェザント (Mikado pheasant) と稱せられ、動物學者間には最も著名なるものとして珍重せられて居るもので、一九〇六年臺灣に於て發見せられたるものである。

抑も本種は始め臺灣一蕃人が貿易の爲め山より下り來た時、其帽子の裝飾として附けて居た僅か二枚の尾羽を材料と

して一九〇六年オギルビー、グラント氏 (Ogilvie Grant) が之を新種として發表したのだ。後完全なる標本を得て全體をも續いて學界へ紹介された。

本種は顔面の赤色部を除くの外全部殆ど美麗なる紺色で、翼羽の各先端は白い。尾は頗る長くて十二三節の白色の横斑を有して居るのを以て直ちに識別することが出来る。

此種は非常に分布區域が狭く目下臺灣の阿里山以外には發見せられてゐない。且つ捕獲せられた數も少いので非常に貴重かられて居る。

サンケイ (Gennaeus swinhoei Gould)

種名は英國の領事ロバート、スインホー (Robert swinhoe) 氏に公務の餘暇心を臺灣の動物研究に寄せ一八五六年より以降六十六年の間時此島へ渡り或は一年餘も此地に住し心を込めて臺灣の動物を研究せし人の名を取りて名付けられたものである。前種に比して、體軀遙かに長大で且つ背部は紺色であるから直ちに區別することが出来る、足は赤いからミカドキジと識別することは容易である。

雌は黒黄及赤褐色の斑點があつて、短小なる冠を有して居る、臺灣の特産である。(完)

日本産蜘蛛類

(其十)

岸田久吉

ウツシマダグモ

學名は Phruotolthus nipponicus K. Kishida

全長三ミリメ、頭胸部は主として黒褐色、歩脚端に淡くなつ

て居る、腹部の地は淡褐色で後方に至る程濃い黒斑が大部分を被ふて居るが斑の有様は一見ヨウロッパ産の一種 (P. Coelius O. Koch.) の如くである。

大正二年六月二十九日典謝海の一無人島老人島で自分が發見したものであるが、和名は浦島の物語から思ひついて命じたのである。

ツヤグモ 學名は *Micaria claripes* *Dornitz et Strand.* 和名は屬名から作つたもの、ドイツでは此屬のものを *Schillerspinnne* と言つて居る。下顎の端は方形で、上顎の後縁には唯一小齒あるばかり。

ネコグモ 之は *Trachelas japonicus* *Hörsberg et Strand.* と言ふ學名のもので全長五ミリメ位、背甲は黒褐色、腹部は枯灰色を呈して居る。下顎の端は丸形で胸板にはへりが著いて居る、背甲の中窩はツヤグモと異なつて明かである、歩脚は全く刺を缺き、第一對は第四對よりも長し。

ハタケグモ科 (Hahnidae)

極めて小形な蜘蛛で多くは圃場の土塊の間に小さい店網を張つて生活して居るけれども、常はあまり目を惹かない、唯露の指いた時にはまことに綺麗に見える故採集しやうと思ふ人は此時に出て行くが可い、それから多數の個體を採つて他の種類と混じらない様に注意する事が必要である。

特徴 (一)背甲はタナグモ科に甚しく似て居り、頭部は長くあつて僅に中凸である、胸部にはほそい中窩や放射溝があること、(二)眼は全く無いか八個あるかで前列は後曲又は

端直、後列は後曲で後列中眼相互の間は中側兩眼の間よりも大であること、(三)上顎の前縁は毛がある丈であるが後縁には三つの齒があること、(四)下唇は三角状にはそつて居り、廣さと長さとが略同じであること、(五)下顎は短廣、中凸で僅かに内方に傾いて居ること、(六)胸板の割合に大きくあつて印刷が無く、多少丸味を帯びて居ること、(七)歩脚は第四對が最長、跗節は各脚共比較的長くあつて末端の三爪は各少くとも二つ以上の齒有ること、(八)雌の觸鬚の爪は齒が一本丈あるか全く無いかであること、(九)間疣の無きこと、(十)六つの蜘蛛が同一直線上に並んで居り、中央のもの(前對)の間は廣く、外側のもの(後對)は二節であること、(十一)氣管の氣門は甚だ横に廣いことなど。

所屬 現今七屬あつて分布は甚だ廣い。**日本産の種類** は一屬五種は小生の手に集つて居るが種數は増すにちがひなし。

ハタケグモ

學名は *Hahnia nipponica* *K. Kishida.* と言ひ、本土産であつて全長一・五ミリメを算する、和名は島に多いから命じたものである。屬名は第十九世紀前葉の蜘蛛學者 *ハーン氏* (O. W. Hahn) の爲にカレスコツホ氏 (1842) の作つたものでドイツ語では語尾を更へて *Hahnice* と呼んで居る。

タナグモ科 (Agelenidae)

和名の如く本科の多くは店網を作る。本草綱目に「草蜘蛛」と言ふ見出で「孔穴の中及草木稠密の處に網を作る、鬚絲の如く帯を爲す、中に就き一門を開いて出入す」とあるのは本

を織したるのなる。ドイツ名は Deckenspinne, Haus spinne, Winkel spinne. イギリス名は House Spider. などと言ふ。人家の角に店を出して居る所の十ミリメ内外の極普通なる蜘蛛である。越後地方に普通なのは **マツモトタナグモ** *Legenaria matsumotoi* K. *Kashida* と言ふ名のもので別種である。種名は恩師松本豊太郎氏にさげたもので、長岡市の人にて中村正雄氏(1910)の発見にかゝる。

キンダグモ科 (Pisauridae)

特徴 (一)背甲の形はタナグモ又はアンタカグモ風であること、(二)眼は八箇二列に並び前列は強く前曲又は後曲であること、(三)口器はタナグモに似て居ること、(四)胸板は丸いか廣心形なること、(五)小き間疣あること、(六)蜘蛛は體の後下端にあつて目立たぬこと、(七)肛門突起が二節に分れて居ること、(八)第四步脚が最短く三爪共に齒あること、(九)歩脚轉節の下末縁に半圓の Notch があることなど。尙ほタナグモ科の雌は卵囊を漏斗内に固着して居るけれどもキンダグモ科のものは上顎を運搬するからすぐに知れる。

所屬

現今四十二屬あつて三つの亞科に分れ屬して居る (一)キンダグモ亞科 (Pisaurinae) (二)タラシウス亞科 (Thalassinac) (三)ハンリグモ亞科 (Dolomedinae) 即ち夫れである。
日本産の種類 十七種あつて次の四屬二亞科に屬する
 キンダグモ亞科 Tetragnophthalma J. Karsch 1878, 1. *Pisaura* Simon 1885, 4. *Caripeta* E. Simon 1898, 1. *Pisaura* Dolomedes Latreille 1804, 11.

キンダグモ

學名は *Pisaura anahita* K. *Kashida* 和名は中村正雄氏(本種の発見者)が小生の姓に因んで(1910)命じたものである。知れて居るのは雌だけ全長七ミリメを算する本屬の特徴をあげると、前眼列は端直又は僅かに後曲、各眼は同距離、中眼は側眼より少しく小し。後列は極端に前曲、中眼は前列のより大きく、其間には中側眼間より小し。中眼域は長さが大。上顎の下縁には三つの齒がある等である。

キンダグモ屬のもので本土中部に最も多しのはヤマキンダグモ (*Pisaura strandi* K. *Kashida*) である。本屬のドイツ名は Wasserläufer と言ふ。

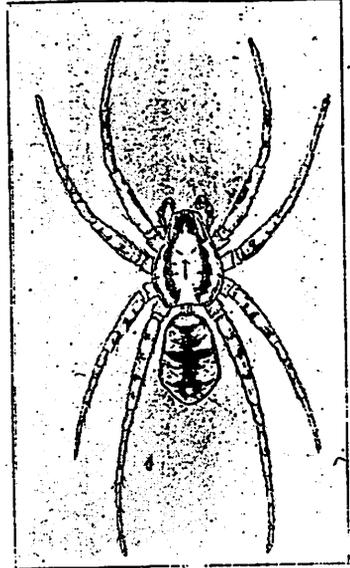
ハンリグモ

學名は *Dolomedes rapor* Rosenbergl et *Stranda* 同屬のもので皆ドイツ名を Listspinne と言ふ。日本の普通種は外に次の如きものがある。(一)ナロウイロハンリグモ (*D. sulureus* L. Koch = *Doviger Doreiz et Stranda*) (二)キクメンハンリグモ (*D. stellatus* K. *Kashida*) (三)スチホソハンリグモ (*D. angustivirgatus* K. *Kashida*) (四)スチプトハンリグモ (*D. lativirgatus* K. *Kashida*)
 ハンリグモ屬の種は小生の從來觀察する所によると幼時は一種の店網を張る。之は主として樹木類の葉上に造るのであつてタナグモやクサグモのたな網と異なる點は其漏斗のつき方にある。即ち、網が厚いため斜走せる漏斗は其遊離端を下の方へだらりと出して居ないのである。生長すると遊牧性になり網を作らなす。雌は卵から幼仔が孵化すると草木上に登つて卵囊を吊し、葉から葉へ可なり多くの絲をわたして所謂子のまごひ (Nursery web or Progeny nest) を作り群集生活期

の幼仔の養護所とする。記載學上に於ける本屬の特徴は次の様である、前列は僅に前曲又は後曲、中眼は側眼より大、各眼同距離。後列は前曲、各眼前列のよりも大形、中眼間は中側眼間よりも小い。中眼域は梯形、前狭。上顎後縁には四つの歯があること杯。

ドクグモ科 (Lycosidae)

イギリス語の Wolf spiders、ドイツ語の Wolf spinne、Lauf spinne、Rennspinne、Tarantel、Sandwihler、Wasserjägerなどと言つて居る蜘蛛は本科のものである。和名のドクグモは小生の命じたものであるが彼の有名な舞踏病の傳説から毒と言ふ冠をかりて來たのである。昔は子引グモと言つたもので、習性は一部分大野薺氏によつて動物學雜誌と本誌で紹介されてゐるから略して置かう、氏の書いたことは既に日本人も西洋人も知つて居た事柄であるけれども殆全部正しいから参考されて可い。



雌のモグクドハナキオ

特徴
(一) 背甲は長い、前方が多少隆く胸部には縦の中窩があること、
(二) 眼は六又は八箇で

三列の如くに並んで居るものが最も多いが明かに二列のものもある(ロイキヌス亞科)第一列は普通小き四眼から成立ち端直又は後曲である(例外 *Acroniops* *Simon* 1898)、(二) 上顎後縁に二三齒外基部に外齒あること、(四) 下唇は自在、(五) 下顎内縁に毛總あること、(六) 腹柄上のキチン片二つが大小不同なること、(七) 第四歩脚が最長、皆有刺で附節下段に毛總があり、末端三爪の中下爪は無齒なこと、(八) 兩性共觸鬚末端に爪があり、雌のには四乃至六箇の齒あること杯。

日本産の種類

はドクグモ亞科のドクグモ屬 *Lycosa* *Tatzeille* 1804) 五十一種である。

ドクグモ

普通なのは(一) キツツキドクグモ (*L. pscudannulata* *Häsenberg et Strand*)、(二) ホシドクグモ (*L. astrigera* *J. Koch*)、(三) ウシキエドクグモ (*L. T-insignita* *F. et S.*)、(四) ヒロキエドクグモ (*L. hiroii* *K. Kishida*)、(五) オホキエドクグモ (*L. coelestis* *J. Koch*)、(六) *Burrowing Lycosa* と云つた中に穴を掘つて家を作るドクグモが世界中に少々あるが、本土産のタカノドクグモ (*L. takanomurana* *K. Kishida*) は日本唯一の其類である。挿圖は沖繩島産のオキナハドクグモ (*L. okinawana* *K. Kishida*) と云ふ全長四ミリ半の可愛らしい種類である。ドクグモ類は到る所に生活するもので種類も多しから盛に採集して頂きたい、日本本土には百種以上あらうと言ふ見込である。

動植物及鑛物



日本産蜘蛛類

(其十二)

岸田久吉

セノクルス科 (Senoculidae)

中央アメリカ及南アメリカ産の唯一屬 *Senoculus* *Taczanowski* (1872) を含むのみである、異名は可なり多い。特徴は (一) 背甲は長卵形で壓した様であり、中窩は深く短 (二) 眼はフクログモ科の *Genus Mulchenner* (1805) に似て居るが前列側眼が甚しく退化して居ること、(三) 上顎は外髁を具へ上下共縁に各三齒がある、(四) 下顎は長く殆ど端直である毛總及鋸共に在る、(五) 下唇は少しく中凸で甚だしく長さの廣さにまさつて居る、(六) 胸板は卵形で後端は短く銳形 (七) 前脚の脛蹠二節は多くの刺があつて第三脚は最も短い、第四脚の蹠節には毛總がある、末端の三爪は皆有爪 (八) 蜘蛛は三對後對は短い乍ら明かに二節である、(九) 小さい間疣がある事杯。

ササグモ科 (Oxyopidae)

特徴 (一) 背甲は大抵高い方で胸部には縦の溝がある (二) 前列は前曲で其中眼は最も小さいが側眼は甚だ大きい、後列は前列よりも廣くて後曲、(三) 類は長く峻峻である、(四) 上顎は多く平滑で其齒の如きも二以下位が多い内である、(五) 下顎には毛總も鋸もある、(六) 下唇は少しく中凸、長さが大い、(七) 胸板は三角状心形、後端は短く銳形、(八) 間疣がある (九) 歩脚には長い刺があるけれども毛總は無い、末端には齒のある三つの爪を見る。

所屬 一見カニグモ、アシダカグモ、ドクグモに似た形をして動作のハヘトリグモに似て居る十屬の蜘蛛を含む。

日本産の種類 左の一屬二種である。

日本産蜘蛛類 (其十一)

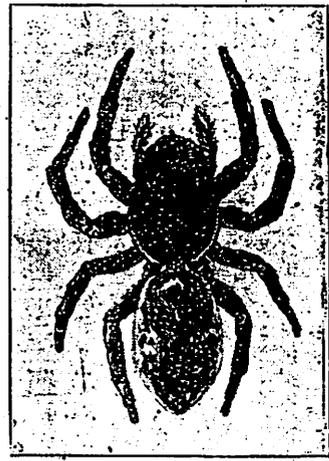
二、和名未定 (O. saganus Bösenberg et Strand)
 サツグモ 草木の葉上に在つて敏捷に餌を捕へるところからイギリス語では Lynx spider と言ふ、蓋しヤマネコグモの意である。日本名サツグモは笹に多いからの名であるが昔から何種を指したものはわからぬ、小生が此種の習性を重く視てほしいまゝにあてたまであらう。両性共十ミリメ内外、背甲は殆ど同高、黄褐色。腹部上面は淡黄色の地に複雑な朱色の斑紋がある。

ハヘトリグモ科 (Salticidae)

單にハヘトリと言ふ、トビスクとかハネグモとか言ふ方言もある。漢字は昔から、蠅虎、蠅豹子、蠅蝗などを通じて居る。イギリス名は Jumping spider 又は Leaping spider ラテンの科名は Salticus Latrielle (1804) から来て居る。
 異名としては Attus Walckenaer. (1805) から作つた Attidae Artoidae, Dendryphantos O. Koch (1837) から作つた Dendryphantidae などがある。ドイツ名は一般に Auspringer, Hüppspinnne である。特徴を擧げるまでもなく容易に他のクモから識別される。

特徴 (一)背甲は前後共同幅に近く且つ可なり高シ、(二)額面は殆ど垂直、(三)中窩は極めて小シ、(四)眼は八つあつて三列に並び第一列は四眼他は二眼宛である、第一列は額面に在つて前方を指し他は背面にあつて上を見て居る、第一列側眼と第三列眼とを方域 (Ocular quadrangle) と名づくる小野を作つて居るのが常である。但しリッソマニス族 (Lyssosoma-

nea) では第一列側眼が背面にまわつて居るため四列になり方域は作られて居ない、(五)上顎には歯がある歯の様子は種類により性により異なる、外腿は痕跡さへあるかないか位である、(六)下顎には毛總と鋸と共にある、(七)脚には強い刺があり末端には立

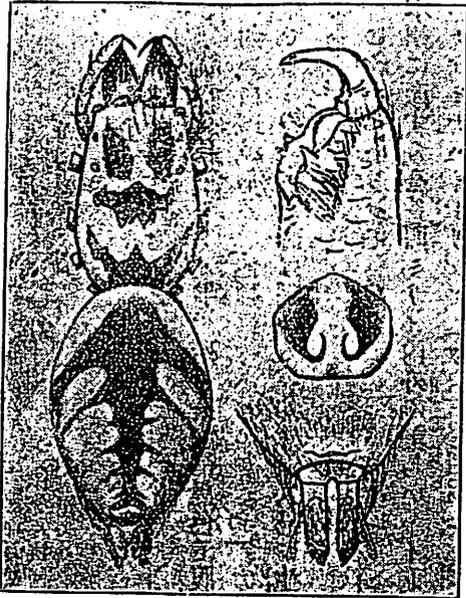


ハヘトリグモの雄。最普通なる。

派な毛總と二つの上爪がある。

所屬 約三百五十屬、亞科を設けたのはシモン氏だけで氏は雌の上顎の後縁に多くの歯あるもの (Puridentati) それが癒着連続するもの (Frisidentati)、及歯がなシか又は唯一本のもの (Unidentati) の三つとした。近頃は此三亞科を撤して其下に氏の作つて居た族を用ひるけれども矢張、多齒のハヘトリグモ、裂齒のハヘトリグモ、單齒のハヘトリグモと言ふ風に形容詞的に修飾語として使用されて居るから由來を知つて居ることは必要である。何分大きな科のこと故ハヘトリグモだけの専門家がある、先程逝去したジョージベッカム氏 (George W. Beckham) は殊に名高い蠅虎通であつた。
 日本産の種類 次の四十一屬九十三種が既知でなほ追々増加の見込。多齒のハヘトリグモ Lycidas Fr. Karnsch 1878.
 1. Myrinachne Mc Leay 1839. 2. 裂齒のハヘトリグモ Hisarius

- E. Simon 1871. 5. Kusumius K. Kishida 1913. 2. Lauteia E. Simon 1838. 1. Maevia O. Koch 1850. 1. Urobalius E. Simon 1902. 1. Sler F. Simon 1888. 1. Silerella E. Strand 1906. 1. Harnochirus E. Simon 1885. 2. 脚蜘蛛のイノコシ Cinella K. Kishida 1914. Rakuhua K. Kishida 1913. 1. Ekkenia K. Kishida 1914. 1. Synagelides E. Strand 1906. 2. Samura G. et



つよに線後の頭上。雌のモグリトハハラキ
うよれ知が有るもモグリトハハラの腹脚て
せ)す示を對前状物は腹の下。脚産生は腹の中
く掃きもの産前腹てへす(種一腹一種)

- E. Pechlam 1832. 4. Chirothecia Tsugunowski 1878. 1. Agorides K. Kishida 1914. 1. Itatella K. Kishida 1914. 1. Telamonia Thorell 1873. 3. Phintella E. Strand 1906. 1. Heliophanus O. Koch 1850. 2. Jotus L. Koch 1881. 5. Evophrys O. Koch 1884. 5. Stiticus E. Simon 1901. 8. Hurius E. Simon 1901. 1. Breda G. et E. Pechlam 1894. 1. Mithion E. Simon 1884. 1. Marpissa O. Koch 1846. 6. Menemerus E. Simon 1863. 5. Pseudoicinus E.

- Simon 1885. 1. Icius E. Simon 1874. 2. (=Icidella E. Strand 1906) Modunda E. Simon 1901. 1. Dendryphantus O. Koch 1837. 3. Bianor G. et E. Pechlam 1885. 2. Rhene Thorell 1873. 1. Aelurillus E. Simon 1884. 3. Hyllus O. Koch 1846. 3. Carhotus Thorell 1891. 2. Evarcha E. Simon 1902. 3. Plexippus O. Koch 1850. 5. Chira G. et E. Pechlam 1896. 1.

アンリヤ 最も能く蟻に似て居るのは日本産蜘蛛では先づアカアリヤ (Myrmarche japonica F. Karsch) とシロアリヤ (M. innermichelis Bösenberg et Strand) とを指す。共に六ミリメートルの愛らしきハントリヤモ、アカアリヤは全身淡褐色を呈し、後者は褐色である。前者はシロの葉上に最も多く、後者はシロの葉上で多シ。

クヌシハントリヤ 學名は Kusumius typicus K. Kishida. 雌のみ知られて居り、其全長は四ミリ半を算する。腹部の地は褐色であるが種々の鱗片から成立して居る所の帯狀の横斑があつて甚だ美しシ。脚疣は短黒褐色で後對は前對よりも長い。屬名は長崎の篤學者久住雅治君の發見を表彰するため小生の命じたものと近頃京都の島津源藏氏は本屬の第二種を發見せられた小生は Kusumius metallicus の新名を附した。此屬はヨーロッパの Lepidemathis E. Simon. 1903. のシヤ屬に甚だ近縁なるものと云ふ。

チカインハントリヤ 學名は Rakuhua nakamurai K. Kishida. 和名ははじめスミスチカイントリーとした。この中村正雄君が越後鉢伏山で採つたものであるが其後全國から禪山の産地が出た。本州に於て極普通の種類である。全長は七ミ

リノ内外。

オシマハトトリグモ 學名は *Chrothecia insulana* K. K.



円殖生其とモクリトヘハマシオ

る。雌の全長三ミリ半、殆ど全體褐色で腹部背面には圖の如き白斑がある。他種はベネツエラ、ギアナ、ブラジルの産であるのに本種許は眠れるが如き無人島に生活して居るのである。

ヒナハトトリグモ 學名は *Jotus linea* (F. Karsch) 九州及本州に産する全長四ミリ内外の美しいハトトリグモである。エチゴトナハトトリグモ (*J. schigoanus* K. Kishida) は中村君の越後長岡で採集した全長四ミリ半(雄)の愛らしき種である。

ハトトリグモ 種名は *Menemerus confusus* Bösenberg et Strand 普通ハミリメ内外。人家壁上に最も普通なる種類で背面に白い部分が比較的が多い。併し同属の他種も随分混じて居る故一寸區別し難い。

丹後の老人島の特産で大正二年六月小生の発見したものである

shida

クロハネグモ 一名ホウソウキグモ、學名は *Icius magister* Karsch と云ふ。色彩上雌雄二形であるため雄の方は別属別種として *Icidela interrogans* Bösenberg et Strand の名が

作られたがもとより一異名として葬つて了へば可いのである。詳細は博物之友第八十號(明治四十四年二月)に掲げた拙著の一論文「クロハネグモに就て」を見られたい。

ニシカハトトリグモ 學名は *Hyllus nishikawai* K. Kishida 初夏の頃路傍の草葉に多い全長九ミリ(雌)位の

ハトトリグモで胸部は黒い。種名は熱心なる蜘蛛の研究者西川愛蔵氏に捧げたものである。

チヤズチハトトリグモ *Plexippus paykulli* Audouin. と云

ふのが其學名である。體の上面中央に縦の條斑があつてそれは腹の後半に於てはひろくなつて居る、雄に於てはその兩側が濃茶色であるから此和名が起つたのである。雌に於ては腹部の後半に當つて白のきれ目がいつて居てよく目立つ。本種は全世界の暖き地方に汎布するもので大さは地方によつて大差がある。日本には同属でミスチハトトリグモ (*P. setipes* K. Karsch) といふ暗褐色で腹部上面に三つの縦斑を區別する普通種以外三種もある。

以上を以て日本産蜘蛛類の話を一先づ綴り了つた。次回に於て補遺と科の檢索表を附載して拙篇の大尾とする考である

棲んで居る、Python reticulatus Schn. で、馬來人は之れを「ウラルサワ」Uar Sawa (水に棲む蛇の義)と呼び、其充分成長したものは、八米突半即ち五間程の長さに達する大蛇である。其他印度に一種、亞非利加に二種有つて、ドナラモ六米突即ち三間半位に成長するものである。新大陸の「ボア」(Boa Constrictor Linn)は世界第一の大蛇で、南米の森林に棲息し、往々十米突以上即ち六間位に達する偉大なるものである。又「アナコンダ」(Eunectes murinus Linn)の方は、同じく南米の産なるも、好んで水澤の中に棲息し、長さは少しく短く、八米突半(五間弱)位に成長するやうである。

オナガキジ 『山鳥の尾の枝垂り尾の』と長いもの、枕言葉に流行されて居る「ヤマドリ」(鶴雉)の尾羽は、中々長いもので、三尺以上のものも屢々有るが、それでも中央支那に産する錦雉俗に「オナガキジ」(Phasianus reevesi Gray)とは競べ物にならない。此種は雉屬中尤も長大なる尾羽を有するものにて、雉よりも鶴雉に近き種にして、其尾の最も長きものは六尺に達し、支那にては、俳優又は喇嘛僧など、之れを

帽に括みて裝飾とする由。

白雉 雉の白色變態は極めて少ないが、鶴雉のは屢々目撃する。然し雉でも鶴雉でも、皆な白雉と云つて居るこれは素人には、對照しなければ容易に區別が出来ぬから、無理もない話で、白雉元年當時の標本も、どちらであるか考へるものであらう。

エナゴウサギ

越後には限らず、信州の北部から、奥州地方では、野兔は冬季になれば皆な白色となるものと思つて居る。これは Lepus timidus Linn. (Variable-hare)と云ふ種であつて、中央以南の暖地に普通なる、Lepus brachyurus Temm. (Japanese-hare)とは、全く別種であつて、前述の雉や鶴雉の白色變態と違ひ、冬になれば、どれもこれも皆一様に、白色に變ずる性質を有する種類であつて、所謂氣候變態と唱へ「ライテウ」「エゾイタチ」杯の、冬羽冬毛と同じ理である。「エナゴウサギ」なる名稱は青木理學士が、曾て日本動物學彙報に發表せられし和名である。

日本産蜘蛛類

(其十二)(完結)

岸 田 久 吉

蜘蛛目科名檢索表

(ガレラデス狀に腹部上面に九つの明かなる環節をも

つて居り、八個の蜘蛛は腹部下面の中央に在る……
リヒスチウス科 Lipistidae.
腹部上面に環節無く、蜘蛛は六個又はそれ以下……二

二、肺を有する居ない、氣管の開口として五つの氣門がある、蜘蛛は六個 **カポニア科 Caponiidae.**

三、肺は四つ **肺は二つ**..... 四

四、節疣及毛櫛を有する **ヒポキルス科 Hypochilidae.**

節疣及毛櫛を缺き、上顎は前方に突出して居る..... 五
觸鬚は下顎(基節)の中外側から出る、蜘蛛は六個.....

五、觸鬚は基節の末端外側から出る、蜘蛛は四又は六個 **チグモ科 Atypidae.**

氣管の氣門は二つあつて微細、節疣がある、下唇は胸板に癒着して居る、雌の生殖門雄の觸鬚の球は極めて簡單である..... **ヒリスタタ科 Filistatidae.**

六、氣管の氣門は二又は一で常の大さ、節疣のあるものと無いものとある、雌の生殖門雄の球は複雑..... 七

七、節疣及毛櫛を有する..... 八
節疣も毛櫛も無S..... 一三

頭は大形で高くなり圓端を有し、後列側眼のみは他の眼から遙かに離れて位置して居る.....

八、頭はほそく、低く、強き圓端を有して居るS、後列側眼は稀に他の眼からはなれて居るだけ..... 九

エレスス科 Eresidae.

九、背甲は腎形で長さは廣さより小い、蜘蛛後對は必ず二節..... **チリグモ科 Oecobidae.**

背甲は腎形でない、長さは小くなS..... 一〇
節疣は二分し、蹠及附に毛總がある、眼はややハシリグモ式である..... **ゾロプシス科 Zoropsisidae.**

一〇、蹠に毛總無し..... 一一
上顎に外髁がある、中窩は縦走して居り、節疣は二分する附に毛總がある.....

一一、上顎に外髁がある、附にも毛總が無S..... 一二
中窩は縦走、肛門隆起は短くて半圓形..... **ウツグモ科 Dioboridae.**

一二、中窩は縦走、肛門隆起は短くて半圓形..... **ハグモ科 Dictynidae.**

一三、肺の氣門二つ、氣管の氣門二つ..... 一四
肺の氣門二つ、氣管の氣門一つ..... 一六

一四、眼は八つ、前列前曲、後列は後曲、前列眼と後列側眼とは一群を爲す..... **ハドロタルスス科 Hadrotarsidae.**

一五、眼は六つ..... 一五
前脚の基節は他脚のと異なり、ほそく柱狀也、爪は二又は三..... **キノシシグモ科 Dysderidae.**

一五、前脚の基節は他脚のと同様の形態を呈し球狀也、爪は二つ..... **タマゴグモ科 Oonopidae.**

タマゴグモ科 Oonopidae.

一六、

蜘蛛は殆ど一列、外疣は明かに二節也、間疣無し……ハタケグモ科 Hahnidae.

一七、

胸板は甚だ廣く、後脚基節は各側に廣く離る……一八
胸板は甚だ廣からず、後方にほそし……二二

一八、

下唇は胸板と癒合して動けぬ……一九
下唇は前記の如くならず……二〇

一九、

背甲に中窩無し、下唇と胸板との間に縫痕無し……ヤマシログモ科 Seytoidae.
背甲に小き點状の中窩あり、下唇と胸板との間に縫痕有り……マシラグモ科 Ledonetidae.

二〇、

上顎は前方に突出して下顎からも遠く離れたり、從ひて其下部の付元は之を望み見るべし……アンモクセヌス科 Ammoxenidae.

二一、

上顎は廣く開くことあるも前方に突出せず……二二
眼は二列也……ヒトヘグモ科 Platoridae.
前列側眼と後列眼とは各三眼宛倒八字を描きその前方に前列中眼あり

二二、

後疣無し又は前疣より短し……プロディドムス科 Prodidomidae.
後疣あり且つ前疣より短からず……二四

二三、

上顎は甚だ大形……アルケア科 Archaidae.
上顎は常の大きさ也……ヒゼングモ科 Zodariidae.

二四、

第一脚は甚だしく肥大し、附は Pedunculate として多くは爪を有せず……パルピマヌス科 Palpimanidae.

二五、

第一脚は異常なく、附節は尋常にして有爪……二五
後疣は甚だ長くして先はほそし……二六
後疣は甚だ長からず肥大せり……二七

二六、

下唇の前端は截形……タナグモ科 Agelenidae.
下唇の前端は鈍形……ヘルシリア科 Hersiliidae.

二七、

肛門突起は甚大形、後疣は前疣よりも大也……二八
肛門突起は小形、長き毛無し、後疣と前疣とは殆ど同大也……二九

二八、

背甲は腎形、肛門突起に長毛あり……ヒラダグモ科 Troctidae.
背甲は長圓形、ハシリグモのに似たり、肛門突起に長毛無し……セノクルス科 Senoculidae.

二九、

歩脚端の爪は三つ有りて毛總無し……三〇
歩脚端の爪は二つ有りて毛總を具ふ……三六

三〇、

第四脚附節の下稜に一列の刺群有り……コガネグモ科の内、ヒメグモ亞科 Theridiinae の全群
第四脚は前記の如くならず……三一

三一、

前脚の蹠脛二節の下稜に刺の二列あり……センセウグモ科 Minetidae.
前脚は前記の如くならず……三二

三三、 下顎は下唇上に向ひ曲る、上顎は殆ど無齒、脚はほそく長し……イウレイグモ科 Pholcidae.
 下顎は殆ど中向に曲らず、上顎は有齒、脚は太く短し……三三

三二、 附は先端に曲れる鋸刺を有す……コガネグモ科 Argiopidae
 附は前記の如くならず……三四

三四、 上顎は頑丈にしてたしかなる齒有り、下唇と下顎は短し……三五
 上顎は弱くして齒も小し、下唇と下顎は長し……三五

三五、 第四脚は他の歩脚の何れよりも長し……ドクグモ科 Lycosidae.
 第四脚は最長ならず……キシダグモ科 Pisauridae.

三六、 前疣は廣く開き離る……ワシグモ科 Drassidae.
 前疣は密接す……三七

三七、 前中眼は甚だ大、後列眼は方域を作る……ハハトリグモ科 Salticidae.
 眼は大小、位置共に尋常……三八

三八、 上顎は肥大し齒も強し、第三第四の後脚は第一第二の前脚より短からず……カニグモ科 Thomisidae.
 上顎は弱く齒も弱し、後脚は前脚より短し……三九

三九、 歩脚端の爪には齒無し、中眼は前曲線上に在り……アハセグモ科 Selenopidae.
 歩脚端の爪には齒あり、中眼は常の中眼域を作る……四〇

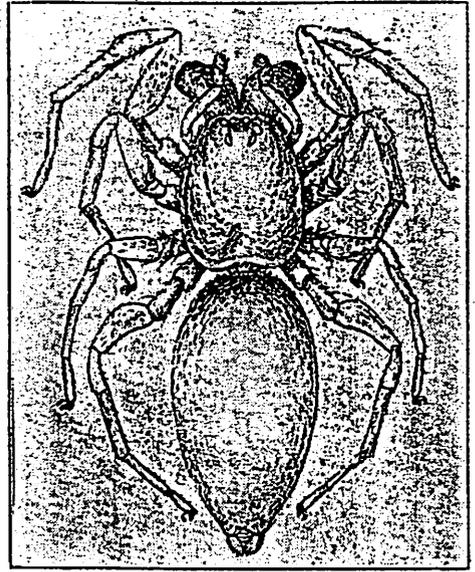
四〇、 第四脚は前脚より短……アシタカグモ科 Heteropodidae
 第四脚は最長……フクログモ科 Olubionidae.

右の科名検索表には少しく申分あれども今日のところ、之以上望まれ難いと思ふ、全世界の蜘蛛の科名検索表としては之がはじめてのものであるから使つてみてもらひたい。

日本産蜘蛛の補遺

昨年十二月以來明かになつた屬を更に附加して置く、屬の内種の増加したものは餘り多きに過ぎて容易に書きたせぬ故遺憾乍ら屬まで止める。拙き記事の今終局を告げる迄小生をばげまし或は導きなどせられた先輩及愛讀者諸君に深謝する。なほ單行本にして出せと申込まれた方も少しはあるが之は唯今のところ何とも返事致し兼ねることを恥ぢて居る。

コガネグモ科 キセギグモ (Organus Kesslering, 1886)
 一種だけ、丹後にて井關尊二氏の發見したもので、此頃今泉氏も伊豫で矮形の標品を採集せられた、コガネグモ亞科に入れる。ミヤギグモ (Miyagius K. Kishida, 1914) 山城寶船山中モメンツルの發で小生の發見したもので雌の中に色彩上二形を區別する、屬名は友人三宅中二氏を記念すべく命じたのである、サラグモ亞科に入れる。キシラシグモ (Chysaster K. Kesslering, 1886)



Prodidomus imaidzumii

hida, 1914) 山城の花園で島津源藏氏の發見せられたアシナグモ亜科の一新屬ラテン名は黄金の星、和名は雲母の意味、共に腹部の色

彩に因んだものである。Neotetragnatha K. Kishida, 1914 島津氏の發見、アシナグモ亜科のものである。Prodromus Hentz, 1870 (= Militia E. Simon, 1870 = Eleleis E. Simon 1893) の一屬日本産となり一科を増した。産地は伊豫、發見者は今泉虎雄氏、種名は Prodidomus imaidzumii K. Kishida 和名は目下考案中。カニグモ科 Neopagida K. Kishida, 1914 山城産カニグモ亜科、島津氏の發見にかゝる。フクログモ科 Eutichrus (假稱) (Eutichrus, E. Simon, 1897) 本屬はフクログモ亜科に隸し、南アメリカに三種あるのみであつたが數年前小生が丹後ではじめて日本産のものを採集し其後山城でも見つけた。種名は Eutichrus nipponicus K. Kishida と言ふ。タナグモ科 Myro Cambidige (1876) キヘウス亞科のもの、未熟の一品を山城で島津氏が發見せられた。

ヘトリグモ科キンペン(トリンチ) (Neobalilus K. Kishida, 1914) 十一月號にウロバルスとした裂齒のヘトリグモであるが彼の屬より區別することとしたから披瀝して置かねばなるまいと思つて書く。カニグモ科 Apyre E. Simon 1895 カニグモ亜科に屬す。日本産のは Apyre nipponica K. Kishida と言ひ山城の産、之も島津氏の發見にかゝる。

お願ひ

毎度科學世界の愛讀者と稱して多數の標本を送越して名稱をつけよと言はれる方が多くて實は甚だ多忙で困つて居る、同好者の事故出来るだけ便利をはかつて居るが左の箇條は是非守つていたゞきたい。小生には從來の行が、りて是非見なければならんのが五十人はあるから是非お願ひする。
一、標品は七十パーセント以上のエチルアルコール漬け、別種毎に別のガラス管又は罎に入れる事。
一、一箇月一回限りとし、一回十種以下とする事。
一、標本は一切お返しせぬものと承知せられ度事。
一、必ず毎回送り状と返信料(三錢切手)を送られたき事。
一、宛名 京都府加佐郡高野村字野村寺三八一番地下名。(三三)

●秋山遊三著内外普通動物誌は、上篇—脊椎動物篇、下篇—無脊椎動物篇の全篇完結を告げたるも、何にしろ二千数百頁の甚大の冊子なるを以て、印刷出版に多大の経費を要し爲に全篇の特價は金九圓といふ譯で、個人購讀者の不便少からせりし模様であるが、今回該書發行管肆興風社東京市日本橋區北島町一丁目二十九にては信用月賦販賣法を開始した、またこの際御申込の方には特別の取扱をなすこと。